
鈴がなる凜となる

あお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴がなる凜となる

【Nコード】

N6048Q

【作者名】

あお

【あらすじ】

中学生の男の子と、名の語られぬ少女、二人の織り成す物語。

〔秋人〕 日常

「それじゃ今日はここまでね。ここら辺テストに出るからよく復習しておくこと。おい、ちゃんと聞いているのかー？ ……ったく」

教材を慣れた手つきで整えると、国語の教師は呆れ顔で教室を後にした。6時限目を終え放課の時間に突入すると、教室内はしじまに代わって、がやがやとした喧騒に包まれた。皆は互いに劳いの言葉を交し合った後、清掃当番のため担当区域へ向う者、そのまま部活動へ向う者と、各々の目的のために散っていった。僕はというと、別に清掃当番というわけでもなく、部活動に属しているわけでもないので、勉強道具を鞆に詰め終えると、まばらに人の残る教室を後にし、そのまま生徒玄関へと向った。

生徒玄関へ向う途中、階段の踊り場で、隣家に住む幼馴染と出くわした。名を『葵』という。傍らには友人らしき人物も見受けられた。

「あきちゃんこれから帰り？」

僕は頷いた。

「そっか。私これから部活だから、一緒に帰れなくてごめんね。気をつけて帰るんだよ。それじゃあまた明日、あきちゃん家で」

葵は友人からの質面攻めに遭いながら、弱った様子で去っていった。僕は手を上げ葵を見送った後、再び玄関へ向った。

校門を出た後、僕は特に寄り道などはせず真っ直ぐに自宅を目指した。十五分程掛けて自宅に到着すると、玄関の扉を開錠し、そのまま一直線に二階の自室へと向った。そして、スクール鞆を机上へほっぽり、部屋隅にある棚の中からスケッチブックと画材を取り出すと、また直ぐに家を出て玄関を施錠した。僕はこれから、趣味である写生に出かけるつもりだった。

——写生を始めたのは、父の影響からだった。写生を趣味にしている父とは、一緒に様々な場所へ赴いては、二人仲良く並んで写生に興じたものだ。その父も昨年事故で亡くなってしまい、今では専ら一人で絵を描き続けている。父亡き後も趣味の写生が続いているのは、自分でも不思議だった。父の死をきっかけに、写生への興味も薄れていくのだろうと考えていたのだが、決してそんなことは無く、今に至るまで描く事への意欲は失われてはいなかった。それどころか、描くことへの意欲は日に日に強まっていくように感じられるのだった——

左手に視線を落とすと、腕時計の針は午後四時十分を指していた。五月の空はこの時刻ではまだ明るく、ほんのりと赤みが差している程度だった。僕は明るい内にと目的地に向けて歩き出した。

目的地である場所までは歩いて十分程の距離があった。僕は自宅のすぐ脇を通る急勾配の上り坂を一定のコンパスで一息に上りきると、左手に現れる細い路地へと入っていった。昼でも薄暗い林と家々に挟まれたその路地を進んでいくと、間も無く右前方に神社の鳥居が、生い茂った笹に半ば隠れるようにして見えてくる。鳥居をくぐり緩やかな石の階段を上ると神社の拝殿が姿を現す。境内は人氣というものがおよそ無く、拝殿はその静謐な雰囲気の中に身を沈めるようにして建っていた。拝殿は丈の高い雑草に囲まれていて、その周りをさらに雑木林が囲っていた。その為境内への陽光は遮られ、年がら年中じめじめとして薄暗かった。僕は生い茂る雑草を掻き分けながら拝殿の裏側目指して進んだ。そこまでくれば目的地はもう目と鼻の先だった。裏手まで来ると、拝殿の裏側を背にして真っ直ぐに草むらの中を進む。すると、絡みついていていた雑草が唐突に姿を消し、開けた場所に出る。そこが僕の目指す場所だった。

目の前に広がる世界は、まさに絶景と呼べる程の壮観だった。高台であるその場所からは、眼下に僕が住んでいる町全体が一望で

き、視線を真正面に向ければ、果てしなく広がる大洋を望むこともできた。さらにもう少し日が落ちてくれば、西日で全てのものが橙色一色に染まり、夕映えにより殊更美しき増した眺めを堪能することもできる。この場所は地元の間人でも知っているものは少なく、まさに穴場だった。僕はこの高台から望む景色をスケッチする為、最近ではほぼ毎日この場所に通いつめていた。それともう一つ、僕がここに連日訪れる理由として、この場所である人物に会えるという事もあった。僕が視線を右に向けると、いつものように彼女はそこに立っていた。

烏羽色のワンピースを纏い、その服装とは対照的にぬけるような白い肌。見た目から察するに同い年くらいの少女。彼女がここに現れるようになったのはつい最近のことだった。最初に彼女と出会った日、僕は目の前の景色を描くことに夢中で、周囲の状況に気など配っていなかった。そんな時、不意に背後から草同士が擦れ合う音がしたのだ。気になってそちらを振り向くと、彼女が佇立したままじっとこちらの方を見つめていた。僕達の視線が交差すると、彼女は柔らかな笑みを浮かべ、そのまま僕の横手まで歩み寄り、正面に広がる景色をただ静かに眺めていた。その日彼女に出会った瞬間から、僕は彼女が纏う、一種形容しがたい何か不思議な魅力に惹かれていった。それから僕はほぼ毎日、夕刻前のこの時間、この場所へ訪れるようになった。

彼女のことについて、僕が認識していることは、左腕に見え隠れする、何がしかの傷痕だけだった。名前、学校、住所など、彼女の素性については一切知らない。彼女は自らについて、進んで語ろうとはしなかったし、僕も彼女のことについて、詮索するようなことはしなかった。彼女の素性についてまったく関心が無いというわけではなかったが、彼女自ら語らない以上、そこには何らかの語れぬ理由があるのだと思ったのだ。なにより僕は彼女とこの場所と同じ景色を眺め、同じ時間を過ごせるだけで十分だったし、それだ

けで僕の心は充足した。余計なことをして彼女の気を害するくらいなら、僕も彼女と同様に沈黙することで、この居心地の良い安穏な時間を守りたかったのだ。このようにして僕たちの関係は、お互いを詮索しないという不文律の元に成り立ってきたと言える。そしてそれが、できることならばこの先もずっと続いてほしいと思った。

僕はいつもの様に彼女の横に陣取ると、いつものように沈黙を守ったまま筆を握った。基本的に僕はスケッチをする際、人物を描く対象に選ばない――それについて特に理由はない――のだが、今描いている風景画が完成した暁には、この景色をバックにした、彼女がモデルの人物画を描きたいと考えていた。夕焼けの中で黄昏れる彼女の姿はあまりにも幻想的で、絵になっていたからだ。まだ本人にその旨を伝えたわけではないが、彼女ならきっと快く了承してくれる気がした。

それから僕は、景色が段々と赤味を増していく中、黙々と筆を動かした。その間僕達は、例によって一言も言葉を交わすことはなかった。日が落ち、周囲が黒味を帯び始めた頃、僕は筆を止め時刻を確認した。針はもうすぐ6時を回ろうとしているところだった。丁度きりも良いので、今日はここで切り上げることにした。立ち上がり、彼女の方に目をやると、僕の視線に気づいたようで、こちらに向き返った。彼女は僕のことを汲み取った様子で頷き、微笑んだ。まるで天使のような笑顔だった。僕はいつものように鳥居の所で彼女と別れ、そのまま帰途に着いた。

帰宅すると玄関の鍵が開いていた。どうやら姉が帰ってきているらしい。僕は家の中入ると、一度二階の自室へ行き、画材を棚に戻して部屋着に着替した後、一階の台所へ向った。

台所では、姉が夕食の支度をしているところだった。漂ってくる香りからすると、どうやら今日の夕飯はカレーのようだ。

「おかえり。もうちょつとで夕飯できるよ。あんたカレー好きでしょ。あ、食器並べておいてね」

僕は頷き、食器を並べた。

夕飯が出来上がるまでの間、居間で過ごすことにした。居間に移動すると、庭に面する掃き出し窓をほんの少し開放した。夜気を孕んだ心地よい風が入り込んできて、そこで僕は心地ついた。

ソファーに腰掛けぼんやりしていると、開放した窓から黒いものが家の中へ飛び込んできた。我が家の一員、黒猫の『すず』だった。すずはいつも朝に家を出て、いつもこのくらいの時間に帰ってくる。足元に寄って来たので顎下を撫でてやると、気持ちよさそうに喉を鳴らした。しばらく戯れていると、居間の入り口から姉の声が掛かった。

「あき、それからすずちゃんもご飯よ。手を洗って台所にいらっしやい」

手を洗った後、姉と僕は向かい合う形でテーブルに着いた。すずは台所隅の定位置で姉の作った夕飯をおいしそうに食べていた。

「そういえば、すずちゃんがこの家に来てもう一ヶ月くらい？

案外早いものね」

……一ヶ月。僕にしてみればあつという間の時間だ。しかし本で読んだ情報によると、猫にとっての一ヶ月は人間でいう約一年に相当するというのだ。僕が漫然と過ごしてきたこの一ヶ月を、すずは何を思い、何を考えて過ごして来たのだろうか。

「よく、『猫は家につく』なんていうけど、すずちゃんはあるにべったりよね。猫はもっとつつけんどんとか、可愛げがない生き物だと思ってたけど、なんか猫に対する私のイメージが根底から覆されたわ」

確かに猫は、同じく愛玩動物の代表格である犬と比較されることが多い、そういう時、犬は人につき、猫は家につくなんて言い方がされることがある。しかしそれは全部が全部あてはまるわけではなく、結局は猫も犬も人間と同じで、気性は十人十色なのだろうと

思う。実際一緒に暮らしてみて、僕が抱いたすすへの印象は、姉の言ったそれとほとんど同意見だった。

「じゃあお姉ちゃん、部屋で学校の課題進めてるね。食べ終わったら食器流しに運んでおいてね。お風呂は沸いてるよ。あと、今月の家庭訪問の日時、決まったらちゃんと教えるのよ」

僕は夕食を終えると風呂へ入り、その後居間で一時間程テレビを観てから自室へ向った。

部屋に入ると、ベット上にはさすがいつものように、先回りして待機していた。頭を撫でてやってから、勉強のために机に向った。

勉強をしている間、すずは僕をただじっと見つめていた。身動き一つせず、机に向う僕の背中を眺めている。何かおもしろいことでもあるのだろうか。僕には猫の考えていることはわからない。

予習復習を終え、明日の授業の準備をしてから、僕は電気を消して布団に入った。すずは僕が立ち上がるの確認してからベットから降りて自分の寢床に就いた。灯りを消し、布団の中で今日の一日の出来事を振り返る。葵と学校へ行き、高台で絵を描き、すずと戯れ、姉と夕飯を食べる。取り留めの無い一日だが、それでいて満ち足りた一日。明日も明後日も変わらぬ日常であることを願い、僕は目を閉じた。

「少女」 狂気

私が初めて彼を見掛けたのも昼下がりの公園で、その日の公園内も、小学生や子供連れの親子が多く、笑い声やら歓声やらが溢れていた。

私はいつもの散歩コースを巡回中で、遊具などが設置されている場所からは離れた位置にある、池のほとりを歩いていた。

喧騒から逃れた場所に置かれたベンチ、そこに彼は座っていた。ベンチに腰掛けたまま、正面の池の、ずっと先の方を見つめ、手に持つキャンバスに何かを描いている様だった。彼は接近した私に気づくことなく、黙々と筆を動かしていた。いつもと同じ光景。しかしその日の彼の表情は、これまで見てきた表情のどれとも違った。

前を見据えるその瞳はとても澄んでいて、何故だか悲しそうに見えた。その時点では、それが何から来る悲しみなのか推察することはできなかった。

私は離れた所から彼を見守ることにした。その時沸き起こった感情は、今までに感じたことの無い感情だった。彼の悲しげな瞳を見てみると、自分の心まで痛んでくる様だった。彼の悲しみの種を取り除いてあげたいと思った。彼が微笑んでくれるのならば、死んでもいいとさえ思えた。大げさなどではなく、心のそこからそう思えたのだ。あるいはそれは、一種の恋愛感情だったのかもしれない。私はこれまでの人生において、一度も幸福を感じるようなことはなかった。どうせこの先も、目的も夢も希望もない、灰色の曇り空のような人生が続くのだろう。それならば、未来ある誰かのために私の人生を捧げてでも構わないだろうと思った。安易な考えだと非難されるだろう。しかし私はその瞬間から、彼の笑顔の為だけに生きようと決心した。

間も無くして彼は筆を止めて立ち上がり、公園の出入り口の方へ歩き出した。私も気づかれぬように彼のあとをつけた。公園を出て十分程度。団地のような場所へ行き着くと、建ち並ぶ民家の内の一軒に入っていた。どうやらそこが彼の家らしい。私はそこでどうしたものかと思案した。私は彼の今後の人生行路を、できるだけ身近で見守ろうと考えている。その為には彼と寝食を共にする必要があるので。しかし彼の家に上がり込む為の良い方策が思いつかなかったのだ。かと言っていつ外に出てくるかもわからない彼をのんびり待つ気にはなれなかった。しかし、その時ふっと、一つの妙案が頭に浮かんだ。少々手荒だが多少のリスクは許容の範囲内だ。思い立ったが吉日と、私は計画遂行に必要な物を得るためにとある場所に向って走り出した。

街に何軒かある酒屋のうちの軒。幸運にも、目的のものは一軒目の酒屋で見つけることができた。それは、店脇の路地にケースに入った状態で置かれていた。目的の物とは酒瓶だった。私はケースからビール瓶を一本を抜き取り、場所を移すことにした。

人目につきにくそうな駐車場を認めると、停めてある車の陰に身を潜めた。これから行おうとしている行為は、人に見られてしまうと計画が頓挫してしまう恐れがある。なので見咎められぬよう、注意して行動しなければならない。

周囲に誰もいないことを確認する。……人の気配は……ない。私は意を決し、手に持ったビール瓶を頭上高く振り上げた。そして、そのままコンクリートの地面に向かって勢い良く叩きつけた。

耳を劈く高音とともに瓶の底が砕け、紅褐色の破片が飛散した。想像以上に音が大きかったので、誰かに音をきかれたのではないかと懸念したが、幸いにも人が駆けつけてくる様なことはなかった。私はほっと胸をなでおろしたが、直ぐに気を取り直した。計画はまだ準備段階を終えただけに過ぎないのだ。これからが本番。肝心要。

右手のビール瓶に視線を向ける。それは砕けた部分に鋭利な突起が出現し、あからさまな凶器へと変貌していた。殺傷力は十分だろう。あとは力加減。致命傷にならぬ程度に加減できれば良い。浅すぎず深すぎず。彼の家までの道順も把握している。計画の障害になるような事柄はなんら見当たらない。……よし、いこう。

私には、躊躇とか、逡巡とかいうものがない。やると決めたことは必ず実行するのだ。

――私は凶器となったビール瓶を逆手に握りなおすと、それを空いている方の手に勢い良く突き立てた。たちまち傷口から鮮血があふれ出し、腕を伝って滴り落ちていく。足元の地面には血溜まりができた。

上出来だった。傷の程度も問題ないようだ。後は意識がはつきりとしているうちに彼の家へ向うのみ。疼く傷口を手で押さえ、私は彼の家へと歩き出した。

日が落ちはじめていた。人目につき難そうな道を選んだ為、少々遠回りになってしまった。しかし既に、彼の家まで残り数十メートルのところまで来ている。私は残された体力を振り絞り、一歩、また一歩と足を進めた。

ひどく流血したせいか、悪寒と倦怠感が体中を支配していた。気を抜くと意識が飛んでしまいそうだった。しかしここで倒れてしまえば、計画のすべてが水泡に帰してしまう。それだけは絶対に避けなければならぬ事態なのだ。幸いにも、彼の家は視認できる距離まできている。玄関先にたどり着きさえすれば、たとえ意識を失ってしまっても計画の成否に影響はないはずだ。

悲鳴をあげる体に鞭打ち、私は歩いた。貧血で視界がぼんやりと霞みながらも、到着点だけは見失わぬように睨み続けた。そして

ついに、彼の家へたどり着いた。

最終目標であるインターホンのボタンを押す。その瞬間、達成感からなのか、または安堵感からなのか、涙が次々に溢れ出して零れた。同時に、今まで自分を支えていた何かが、体から抜けていくのがわかった。支えがなくなったことで、体が瓦解するかのようにその場に崩れ落ちてしまった。充足した気持ちの中、私は血と汗と涙を流しながら、徐々に意識を失っていった。

「少女」 焦燥

意識を取り戻した時、私ははじめ、自分がどこにいるのかわからなかった。まったく見覚えのない景色、匂いだったからだ。周りを見渡すと、なにかの計器類のようなものがたくさん置いてあるのが目に付いた。普通の家には置いてない物のようだが、一体ここはどんなのだろう。

意識を失う前の記憶を思い出そうとした。最初は朧げだった記憶が、徐々にだが時間とともに覚醒していき、やがて記憶の全容を思い出すに至った。

私は一人の少年の家に上がり込む為に、ある計画を企てた。その計画とは、自らを傷つけることで彼の同情を誘い――汚いやり口だが、他に良い方法がなかった――彼の家の住人として取り込んでもらう、という内容だ。計画を無事完遂した私は、不覚にもそこで意識を失ってしまった。そして先程、この見知らぬ場所で目覚めたという次第だ。

回想してから初めて、自分が負傷している事実を自覚した。怪我をしているほうの腕を見やると、自ら傷つけた腕には包帯が巻かれていた。傷の具合はというと、時折軽い疼痛が襲ってくる程度で、それほど重症というわけではなさそうだった。私をここに寝かせてくれた人物が治療を施してくれたのだろうか？ そうだとしたら、一体どのような人物なのだろうか？ 一番考えられる可能性としては、ここが病院で、私を治療してくれた人物が医者であるという可能性だろう。私が彼の家の玄関先で倒れているところを、彼または彼の親兄弟が発見し、病院に運んでくれたという風に考えれば、今おかれている状況についても納得がいく。そしてもし、この想像が正しいのなら、傷が完治する頃には、晴れて私は、彼の家の新しい同居人として迎え入れられることだろう。

これから始まる新しい生活のことを思うと、胸が躍った。嬉し

さのあまり動悸がして、心臓が脈打ったびに、傷がずきずきと痛んだ。身を削ってまで計画を敢行した甲斐があったというものだ。もう少ししたら彼が迎えに来てくれるだろう。それまでに私にできることといえば、傷の治療に専念することだけだ。今は体をゆっくり休め、来る日に備えることにしよう。

私は目を閉じ、まどろみの中で夢想する。眩く光る虹色の未来。どこまでも暗く灰色だった日々に、生きる目的という光を彼は与えてくれた。感謝せずにはいられない。……ありがとう。久しぶった温かい気持ちの中で、私は眠りについた。

翌朝、私は何らかの物音で目を覚ました。部屋の入り口に目をやると、白衣を纏った人物が医療品らしき物に乗せた台車を押して部屋に入ってくるところだった。私は促されるままに薬の塗布と包帯の交換をしてもらった。治療が終わるとその人物は部屋を後にした。そういうわけで、私も私は部屋にひとり残されてしまった。

医者は現状については何も説明してはくれなかった。聞かれぬことには我関せずといったところだろうか。それにしても、いたわりの言葉一つくらいかけてくれてもよいと思うのだが。まあ良い。私はそんな細かいことなど気にしない性質だ。それよりも、私には起きてからずっと気にかけていることがあった。

彼は今日、面会に来てくれるだろうか。そのことが頭の中の殆どを占めていた。もしも来てくれるのなら、夕刻あたりだろうか。日中は学校へ行っている可能性が高いからだ。それまでは彼に会える事だけを考え、憂鬱な時間を乗り切ることになしよう。きっと彼の笑顔を目にすれば、腕の傷だったちどころに完治してしまうことだろう。私は期待に胸を膨らませ、対面の時を待った。

辺りに夕闇が広がりはじめ、病室のカーテンが閉められる。

結局その日、彼は面会には訪れなかった。私は慚然として、ただ病室の天井を仰いでいた。

今日私の前に現れたのは、食事を運んできた看護師のみで、他に見舞い客などは一人も訪れなかった。窓の外を眺めては、まだかまだかと溜め息をつき、扉が開かれたと思えば看護師で、気がつけば日が落ち、室内灯が点けられていた。抱いていた期待が大きかった故に、落胆の度合いも大きかった。

私は彼が訪れなかった理由について、あれやこれやと思索してみた。例えば、体調を崩してしまつて、今は家で安静にしている、とか、親類に不幸があり、そちらの葬儀に出席するために、こちらに来られなくなった、とかだ。しかし、いくら考えたところで、本当の理由など確認する術も無いし、この胸苦しい気持ちがかどうかになるというものでもなかった。

そんな時、ふつとある嫌な可能性が脳裏をよぎった。それは、彼、または彼の家族に私を迎え入れるという意思がはなつから無く、私の存在などは疾うに忘れていて、私は訪れるはずも無い彼の迎えを胸躍らせ待ち焦がれている、という可能性だった。それは私が考え付いたシナリオの中で、もっとも無慈悲で、哀れで、残酷なシナリオだった。私は頭を振りその考えを振り払おうとしたが、一度その思考に至ってしまうと、なかなか考えを拭い去ることはできなかった。私は何度も自分に言い聞かせた。彼は私を見捨てなどしない、必ず私を迎えに戻ってくるのだ、今日はたまたま急用が入って、来れなかっただけのことなのだ、と。しかしその言葉は、言い聞かせるほどに真実味を欠き、胸の中に虚ろに響いた。そしてそれは、私が眠りに就くその間際まで、私の頭の中に纏わりつき、離れることは無かった。

翌日、依然として私は彼を待ち続けた。しかしながら、その日も彼は私の前に姿を現すことは無かった。疑念は深まり、私はその夜、ついに耐え切れずに嗚咽した。頭の中では彼のことを信じたい

と思っていたても、つきつけられる非情な現実に、その思いも打ちのめされ、弱っていった。

その後も彼が訪れる気配は一向になく、ここに来てからすでに一週間が経過していた。その間私は、包帯を交換し、彼を待つだけの日々が続いた。それでも私は彼のことを待ち続けた。彼のために生きると誓った故に、その儚い希望にすぎる他無かったのだ。

一日、また一日と、無常にも時は流れる。私は相変わらず、彼へ思いを馳せる。傷は完全に癒え、包帯も外されていた。そしてもうすぐここも二週間が経とうという時、唐突にそれは訪れた。

私はその日、朝食を終え、いつものように窓の外を眺めていた。扉が開かれる音がしたのでそちらを見ると、そこには医者が立っていた。医者は私の元に歩み寄ると、一言だけ、「おめでとう」と告げた。

その後、医者とともに部屋を後にした。その時私は、困惑に似た複雑な思いを抱いていた。今までに、医者に連れられて病室の外に出たことなどなかったし、先程医者の口からでた『おめでとう』の意味も量りかねていたからだ。言葉通りに受け取るならば、それは私に対してなにか良い事が起きたことを意味するだろう。それが単に、傷が完治したことに對する言葉なら落胆するだけだが、今私が置かれている状況からして、私にはある期待が胸奥にあった。

受付ロビーに到着した時、若い女が一人、ロビーチェアに座っていた。見知らぬ女で、私達の接近に気づくと、女はこちらに歩み寄り頭を下げた。

「こんにちは」

私の予測は当たっていた。私は女の家、引き取られることになったらしい。それがいつごろに決定した事なのかは知らないが、これedyouやく、ここから脱け出すことができるのだ。私は素直にそれを受け入れた。

それから女は医者と何がしかの言葉を交し合った後、礼を述べ

て施設を後にした。私も女と連れ立って玄関を出た。女はそのまま付置された駐車場へ向うと、自分の所有しているらしいネイビーブルーの軽自動車の前で立ち止まった。女は私を助手席に乗せると、自らも運転席へ乗り込んだ。これから彼女の自宅へ向うのだろうか。車は微かな振動と静穏なエンジン音とともに、ゆっくりと動き出した。

施設を出てしばらくは市街地の中を走った。窓外を通過していく景色から、どうやら車は私の見知らぬ土地を走っているようだった。先程まで私が収容されていた施設は、私が元いた地域からは幾分離れた場所にあるのだろうか。

道すがら、女は誰とはなしに呟いた。

「あき、今日の事知らないからきつと驚くだろうな。ふふ」

『あき』とは、どんな人物だろうか。願わくば、私の知る『彼』であってもらいたいと思った。だが、一度も面会に訪れなかったことを考えると、その可能性は低いだろう。例えその人物が私の知る彼とは別人で、全く繋がりのない人物に引き取られたのだとしても、機会をみてその家から脱け出せばいいだけの話だ。そしてまた改めて彼に会いに行けばいい。その時は、先のような失敗は避けなければならぬ。今はただ、前回よりも優れた策を練ることだけを考えればいい。それまでは彼女の家に居座り、好意を有効的に利用することにしよう。

十五分ほど走り、二人を乗せた車は市街地から郊外へと抜けた。そのころには、背の高いビルなどの建築物は目に付かなくなっていた。車が丁字路に差し掛かる。信号機は青だったので、そのままウインカーを点灯し右折する。その直後、視界に入った景色に、私はなにか、既視感のような感覚を覚えた。確信ではないのだが、そこはかとなく見覚えがあると感じたのだ。しかしそれは単なるデジャ

ビュなどではなく、実際に視認したことのある景色だということが、目的地に近づくにつれてわかってきた。

車を数分走らせると、飛び込んでくる景色は私のよく知る懐かしき故郷の町並みへと変わっていた。私は、元いた町へ帰ってきたのだ。そしてそれは、『彼』の住む町でもあるのだ。

思いがけない幸運に、私の胸は高鳴った。彼は今、この町の何処にいて、何をしているのだろうか。私は今すぐにでも車から飛び出し、彼を探しに行きたいという衝動に駆られた。しかし私は、それを懸命に堪えた。つい先程、きちんと計画を立てた上で改めて会いに行こうという今後の方針を心に留めたばかりではないか。冷静になれ。今は成り行きを見守る他無いのだ。とりあえずは女の住まいが町のどの辺に位置するのかと、そこから彼の家までの位置関係を把握することが大切だ。希望としては、なるべく彼の家までは近い距離であって欲しいのだが。

思いが通じてか、女の運転する車は彼の住む地区へと向っているようだった。もしかすると女は、彼の家のすぐ近所に住んでいるのかもしれない。あわよくば、実は隣家だということもありえぬ話ではない。などと考えている間にも、車は彼の住まう場所へと着実に近づいていた。そしてついには、彼の家を視界に捉えられるほどの距離まで来てしまった。尚も車は彼の家へ近づいていく。十字路差し掛かるが、道を逸れる気配はない。そして残りは五十メートル程となった。私の心拍数が上昇する。車は彼の家を歩き過ぎることなく、徐々に減速し、家の正面まで来ると、一旦停止した。そしてそのまま車を後退させ、敷地内に進入した後停車した。

「よし、着いたわよ」

あまりの出来事に、私は正直面食らってしまった。なんと彼女の目指していた場所とは、彼の家だったのだ。女と彼がどういった間柄なのかはわからないが、想像するに、近親であることは間違いないだろう。そして、私もこれからはこの家の住人として生活して

いくのだらうと思った。これで計画などといった煩わしいものに、あれこれ悩むこともなくなった。いや、これはもうそういう問題ではないのだ。だって、扉一つ開ければ、その向うに、彼がいるのだから。

期待と不安で、胸が一杯だった。私は車から降りると、女とともに正面玄関へと向った。そこは、私が施設に運ばれる前に意識を失ったあの場所だった。その場所にいと、達成感に満ちていたあの時の情景が蘇るようで、なんとも感慨深かった。足元の白いタイルは、洗い流されたのか血の痕は残っていなかった。

彼女は上着のポケットから鍵束を取り出すと、玄関の扉にそれをさして開錠した。小気味いい音がして扉が開かれる。

「ただいまー。あきー、帰ったわよー」

二階の方からこちらへ向ってくる足音。正面の階段を何者かが降りてくる。私の心臓は早鐘を打った。

——そして階下に姿を現したのは、紛れもない彼だった。

私を認めた彼は、一瞬驚いた表情を見せた。だが、それはすぐに、微笑へと変わった。その笑顔を見て、緊張で強張っていた私の体は一気に弛緩した。それはまさに天使のようで、ああ、私はこの日のために生まれてきたのかもしれないな、と思った。女が私に話しかける。

「ようこそ我が家へ。あなたはたった今から、私達家族の一員よ」

こうして私は、この家の家族の一員となった。これから私の新

しい人生が始まるのだと思うと、胸が高鳴った。そしてこの幸福が永劫に続いてほしいと、私は願った。

〔秋人〕 兆候

朝目覚めた僕は、ベットから立ち上がって部屋の東側にある窓辺に向かい、カーテンを開いて窓を開放した。光が室内に差し込むと同時に、朝の新鮮な空気が、徐々に室内を満たしていった。

机上の時計を見ると、時刻は七時五分だった。目覚ましのアラームをセットした時刻よりも前に起きてしまったようだ。愛猫のすずはというと、気持ちよさそうな顔で寝息を立てていた。僕は目覚ましのスイッチを切り、すずを起こさぬよう静かにドアを開けると、一階へと向った。

一階に下りると、そのまま台所に向った。食パンを二枚トースターに入れタイマーをセットし、パンが焼けるまでの間にトイレを済ませ、洗面所で顔を洗った。顔を洗い終え台所に戻ると、冷蔵庫から牛乳を取り出してコップに注いだ。トーストの方はというと、いい具合に焼けて出来上がっていた。僕はそれに、ひとつはマーガリン、ひとつは杏のジャムを塗り、先にマーガリンのほうから食べ始めた。僕がトーストを食べていると、すずが引き戸の隙間から台所に入ってきた。僕はすずの分の朝食を用意してから、再びトーストを口に運んだ。

朝食を食べ終え、歯を磨いてから二階の自室へ戻った。学校の制服に着替えて時刻を確認すると、七時三十分だった。僕は部屋の窓を閉めた後、鞆を持って一階の居間に行き、テレビをつけた。どこの局も朝はニュース番組なのでそれをぼんやりと眺めていると、程なく玄関インターホンが鳴った。玄関に向かい扉を開けると、そこには例によって幼馴染の葵が笑顔を浮かべて立っていた。

「おはようあきちゃん」

僕はテレビを消してから、再び葵の待つ玄関へと向った。それと同じくして、すずも台所から顔を出し、僕らと一緒に玄関を出た。（すずはいつもぼくが朝登校すると同時に外出し、夕方過ぎになる

まで帰ってこない)

自宅から学校までは歩いて十五分ほどの距離にあった。朝の住宅地の通りには、緑色の通学帽をかぶった集団登校する小学生達、ゴミ出しをする主婦、陰気な顔つきをしたスーツ姿のサラリーマンなどの姿が見られた。僕らもそんな雑多な人たちの一部となり、学校へ向かって歩いた。すずはというと、どこへ消えたのか、その姿はもう見えなくなっていた。

「すずちゃんいつも元氣だよねー。朝早くからお出掛けだもん。私達も負けてらんないな」

葵が呟く。それを聞いて僕は、姉に聞かされたある話を思い出した。それはすずが僕の家に住まうきっかけとなった話だった。

——その日は日曜日で、僕は昼過ぎまで外出した後帰宅し、疲れたので自室で眠っていた。姉はこれから夕飯の準備に取り掛かろうとしていたところで、そんな時に玄関のチャイムが鳴らされた。回覧板は先日に戻したばかりなので、隣の立花のおばさん（葵のお母さん）が裾分けに訪れたのかと思ったらしい。——立花家は、我が家にしばしば訪れては、惣菜を作りすぎたと裾分けをしてくれるのだ——玄関に向かい、来客を出迎えようと扉を開けた姉は首を捻った。玄関先に誰も立っていないかったからだ。チャイムの音は聴き間違っていたのかと思って扉を閉めようとした時、玄関先の地面になにか黒いものが置いてあることに気づいた。それは一般的な炊飯器程の大きさをしていた。怪訝に思いながらもその黒いものが何か確かめるために近づくと、どうやらそれは、なにか布のようなものらしかった。手にとって確かめようとしたとき、その衣の包まれるようにしてなにかが中に潜んでいることに気づき、姉は身を退いた。布が微かに上下していたのだ。周囲の地面を見渡すと、その黒い布に向って血痕のようなものが点々と続いていることが確認できた。それで姉は、布に包まれて小さな動物かなにかが中にいるのだと考えた。

姉は布の中身を確認することにした。中に潜んでいるものの得体が知れないという恐怖はあったが、仮にそれがまだ息のある生き物であった場合、一刻も早くそれを動物の病院へ運ぶ必要があると思った。また、先程の布の上下が呼吸によるものだとすると、中の動物はまだ生きているはずだと考えた。姉は覚悟を決め、包んでいた衣を取り払った。

中に隠れていたのは、一匹の黒猫だった。黒猫は左の前足を怪我しているらしく、その周辺が血で濡れていた。猫の怪我に気づいた姉は駆け足で家の中へ引き返し、直ぐ様きれいなタオルを持って戻ってくると、猫に駆け寄り患部をタオルで止血した。その後電話帳で最寄の動物病院の住所を調べてそれをメモすると、二階の自室で眠っていた僕を揺すって起こした。姉は僕に、「出かけてくるから留守番お願い」とだけ言い残し、車に乗り込み動物病院へ向ったのだった。

それから二週間経ち、黒猫は我が家に引き取られることとなった。——といっても、我が家で引き取るということを僕が知ったのは、黒猫の退院する当日のことだったのだが——

病院に運ばれた黒猫には首輪がついていなく、また搜索願などもでていなかったという。おそらく野良猫だという判断がなされ、引き取り手が現れなければそのまま保健所へ送られることとなった。姉はそこで、その猫を自ら引き取りたいと申し出た。その申し出は受諾され、黒猫の傷が完治した頃迎えに来るという約束を交わした。そして僕には一切そのことについて知らされないまま、二週間後の退院の日を迎えたのだった——

以上が姉が僕に話してくれた、すずを引き取るに至るまでの話の顛末だ。因みに怪我を負わせた人物や、玄関先に放置されていた理由はわかっていない。もしもそれが嗜虐趣味の異常者による犯行なら、早い段階で捕まってほしいと願う。

「それじゃあね」

学校へ到着した僕らは、いつものように生徒玄関で別れ、それぞれの教室へ向った。教室の直ぐ近くまで来ると、既に扉の向うからの騒がしい声が聞こえていた。扉を開けて自分の席へ向う。朝にも関わらず教室は賑やかで、あちこちで談笑やら奇声やらが飛び交っていた。僕は席に着くと、教室正面の時計を見やった。八時十分。ホームルームの時間まではまだあと五分ある。

ホームルームが始まる前にトイレに行こうかなどと考えていると、友人の『八木武』が声をかけてきた。

「おはよう。おい秋人、三年の須田と神尾。二年の三田村って先輩、しってるか？」

唐突な質問だった。『須田』と『神尾』と『三田村』。三人とも知らない名前だったので僕は首を振った。

「そうか。いやなかなか、最近そいつら三人が一年の奴を標的に金をまき上げてるらしいんだ。それで、最低でも既に五人は被害にあってるらしい。ほら、今日伊藤が休んでるだろ。そいつらにたかられたって噂だ。だからお前も気をつけたほうがいいぞ」

そこで予鈴が鳴り担任の教師が現れた為、八木は手を振り自分の席へと戻っていった。

それにしても、この学校でゆすりが横行しているという事実が初耳だった。確かに今日クラスメイトの伊藤という生徒は欠席していた。しかしその原因がゆすりによるものなのかどうか本当のところはわかり得るはずもなく、僕は暗鬱な気持ちを抱えたまま午前の授業に臨むこととなった。

四時限目の授業が終り、校内は昼食の時間へと突入した。僕はいつものように仲の良い友人三人と合流すると、適当に空いている場所を見つけて一ヶ所集った。そして机を四つ寄せ合わせてから弁当を並べ、箸を取った。

依然として僕の頭の中は、今朝八木の話していたことの内容で占められていた。僕は気持ちの晴れぬままに弁当を口に運んだ。当の八木はというと、その話についてはまったく気にしている様子はなく、お得意の機知に富んだ発言で皆の笑いを誘っていた。そんな彼の姿を見て塞いでいる自分が馬鹿馬鹿しく思った僕は。そのことについては、あまり深く考えないようにしようと思つた。しかしその思いは直ぐにかき消されることとなった。

昼食を終えた僕は、しばし友人たちの語る面白おかしな話に耳を傾けていた。そんな時、教室の出入り口のほうでクラスメイトが僕の名前を呼ぶ声がした。

「おい、藤沢いるー？ 二年の先輩が、お前に話があるからちよつと屋外の体育倉庫のとこまで来てくれってよ」

その一言で、恐れていたことが訪れてしまったと思つた。たまま自分に用があつて呼び出したのかもしれないが、僕には二年に知り合いと呼べるような人はいないし、第一体育倉庫の裏なんか呼び出すのは不自然だ。多分その二年の先輩というのは、八木の話していた三田村という先輩だろう。比較的内気な性格である僕は、ゆすりを働こうとしている者には格好の標的なのだ。

「秋人、お前その二年に心当たりあるのか？ ……ないなら、もしかしたら朝話した例のやつかもしれん。おい、俺も一緒についていこうか？」

八木が同行を申し出てくれたが、僕は首を振り、それを制した。友人をこんなことには巻き込みたく無かつた。他の友人は、「屋外に呼び出しながら絶対に怪しいから、行かないほうがいい」「先生に報告したほうがよい」などと助言してくれたが、今行かなくても再び呼び出しが掛かることは明白だし、教師に告げ口したとして、それが相手に露見した時にさらに悪質な報復をされるかも知れないと考え、結局彼らの助言には背く形となった。僕は彼らにこの事は誰にも口外しないと約束させ上で、教師にも何も告げずに一人だけで指定された場所へと向つた。

体育倉庫は生徒玄関を出た後、校舎沿いを西へ真っ直ぐいったところの隅に設置されていた。体育倉庫は学校の敷地を囲うフェンスと校舎の間にちょうど挟まれるように建っていて、人目につきにくい倉庫の裏は殆ど不良たちの喫煙所と化しているらしかった。僕が倉庫の近くまで来ると、僕を呼び出した当人だと思われる男が倉庫に寄りかかるようにして立っていた。がっしりとした体格で背が高く、遠目に見ても百七十後半はありそうだった。彼は僕が現れたことに気づくとこちらに歩いて近づいてきた。

「よう。誰にも言ってねーよな？　とりあえず裏までついて来い」

彼はそう言ってから周囲を見渡し、近くに誰もいないこと確認してから倉庫の裏へと歩き出した。僕は覚悟を決め、後ろに従って歩き出した。

倉庫の裏では二人の生徒が煙草を燻らせていた。一人は小柄で、まるで爬虫類のようなぎょろぎょろとした双眸の男だった。地べたに座りこみ、こちらを一瞥してから興味がないう風になすぐ視線を戻した、もう一人はだらしなく制服を着崩した中肉中背の男で、いやに浅黒い肌をしていた。その男はフェンスにもたれかかった状態でこちらを値踏みするような目で見ていた。

黒い肌の男が僕を連れてきた男に言った。

「三田村、そいつがお前の言ってた奴か？　たしか藤沢とかって一年」

「はい、そうです。だろ？　一年」

僕はおずおずと頷いた。気がつけば両手のひらに凄まじい量の汗をかいていた。

「ふーん。おい須田、こいつ知ってる？」

座り込んだ男は振り向きもせずに、「しらね」とだけ答えた。

「……まあいいや。とりあえず本題入るけど、俺ら今見ての通り金銭的に非常に困窮してるわけよ。それでね、今お金に余裕ある

方々を呼び出して、僅かながらカンパを頂いております。もちろんそちらの厚意という形でね。まあいくら察しが悪い奴でもここまで言えば後は大体わかるよね。ようするにあなたの温情に与りたいと。そういうことなんですよ。……んでお前今金持ってる？」

こういう事態に慣れていないためか、それとも緊張によるものか、その時僕は極度の吐き気をもよおしていた。そんな混濁する思考の中で、この状況に置いて考え得る作善の策を導き出そうとした。まず考えられる道として二つの道が浮かんだ。一つに、素直に所持している金銭を引き渡すということ。しかしこの方法をとってしまうと心の弱さに付け込まれることとなり、今後彼等からの強請を度々強いられることは自明だ。そしてもう一つに、彼らの要求に断固として拒否すること。こちらは相手に、「こいつは金をよこしそうもない」と判断されて見限ってもらうことができれば、今日限りで彼等との関係を断ち切ることができるだろう。しかしこちらがそういう意向を示せば、彼等が暴力的制裁に出てくることは必至だ。

問い掛けられてから三分程が経過していた。相変わらず僕は激しい嘔吐感に抗いつつ、荒い呼吸を繰り返していた。実のところ僕の考えは大方まとまっていた。だがどちらを選ぶにせよ、僕にはもうひとつ解決すべき事柄が残っていた。それはこちらの意思を相手に？どう伝えるか？ということだった。

「ねえ、金もってるのもってないの？ 黙ってたかわからないだろうって。……もしかしてこのまま黙ってればこの場を乗り切れるとか思ってる？ 残念ながらそれないから。今直ぐ答えないと血を見る事になっちゃうよ。」

黒肌の男が痺れを切らして責め立てる。しかし僕には沈黙するほかなかった。そうしていると、三田村という男が口を開いた。

「神尾さん、もしかしたらこいつ、言葉を喋れないのかも知れないです。さっきこいつを呼び出しに言った時にこいつのクラスの奴が言ってたんですが…… 神尾さん、一年くらい前にこの街でト

ラックの暴走事故があつたの覚えてますよね？ 赤信号を無視したトラックが交差点を突っ切ろうとして横から来た乗用車とぶつかった後、そのまま歩道に乗り上げて歩いていた人を何人かはねたつてやつです。そんなとき新聞やニュースでも大きく取り上げられてたんでまだ覚えてると思いますが、実はこいつ、そんな時乗用車に乗ってた本人らしいんですよ。両親と三人で乗ってたらしいんですが、運転席と助手席の両親は死んで後部座席にいたこいつ一人だけが助かったらしいです。それでその時からこいつ、ショックで声が出なくなっちゃったらしいですよ。本当かどうかは知りませんけどね」

「……おい一年、いま三田村が話したことは本当か？」

三田村とかいう男の話していることは概ね事実だった。一年前、僕は交通事故によって両親を失った。後から姉に聞いた話だと、両親があんな姿になったのに僕が無傷で生き残ったのは奇跡的なことらしい。しかし本当の意味では、僕は無傷ではなかった。

事故の後、僕は自分が言葉を発声できなくなっている事に気づいた。医者に通院を受けた際、口頭で伝えようとしても声を出すことができなかったのだ。発声の仕方をまるで忘れてしまったようで、つい先日まで自分がどんな風に喋っていたのかさえ思い出すことができなかった。医者の診断の結果は、心的外傷による失声症ということだった。といってもこれは一時的なもので、個人差はあるが普通に生活していれば徐々にだが話せるようになるとのことだった。しかし僕の場合は、一週間が経ち、一ヶ月が経っても回復の兆しは見えず、事故から一年経った今でも未だ声を取り戻せずにいた。自分でも時が解決してくれるような簡単なことではないのだと自覚していた。周りが思っている以上に僕の心に刻まれた傷は深く、その当時の衝撃が、まるで楔のように心に突き刺さって残っているのだ。なんたって、あんな凄惨な光景を目の前で見せられてしまったのだからしかたがないというものだ。僕は一生という長い時間をかけて自分の声を取り戻すしかないのだ。

僕は神尾という男の問いに頷いて答えた。その時僕はやりきれなさと同時に、静かな怒りを感じていた。こんな奴等に僕の過去を詮索されたことが嫌で嫌でしかたがなかった。

「ちょ、マジなのかよ。引くわー。でも、なんか嘘っぽいけどなあ……。まあ別にそんなこと俺には関係ないですけどね。とりあえずお前が喋れないことはわかったからさ、金持ってるのかどうかだけはつきりしさせてよ。肯定なら頷く、否定なら首振ってでいいからさ」

僕は肯定の意を示す為に頷いた。

「そうか。それじゃあお前に同情の気持ちがあるなら、三田村に金を渡してやってくれ。いいか、これは強制じゃなくお前の心持次第だからな」

僕は三田村という男に所持していた金を渡した。それは姉に昼食代として渡されているものだった。断然納得できる行為ではないが、僕としてはとにかくこの状況から解放されたかったのだ。彼らの言うことはいはい聞いているほうが、解放される方法としては手っ取り早いと判断した。

「話がわかるねえお前。三田村、いくらだ？」

「三千元ですね」

「三千元？　おいおい勘弁してくれよ。こんなじゃ足りねえ。すぐに使っちゃうよ。うーんそうだな……。十倍。これの十倍の金を持って、明日同じ時間にこの場所に来い。ばっくれたり金が足りなかったりしたら、どうなるかわかるよね？　それじゃあまた明日。おいお前ら、戻るぞ」

神尾という男の号令で、彼らは生徒玄関の方へと引き上げていった。一人残された僕は、こみ上げてくる嘔吐感に耐え切れず、近くにあった外トイレに駆け込み嘔吐した。吐いた後も口の中に残った吐瀉物が更に吐き気を煽り立て、何度も嘔吐を繰り返した。やがて胃に吐き出すものがなくなると、僕は水道にいき、水で口をすす

いだ。

胃の中身とは対照的に、僕の頭の中は様々な感情が入り混じり、破裂しそうなほどに膨れ上がっていた。そのせいで僕の頭は悲鳴を上げ、何も考えられぬ具合だった。それに精神が極度に疲れたせい、ひどく眠い。今はただひたすらに眠りたかった。僕は自分の教室へ向って、足を引きずるようにのそのそと歩き出した。

〔少女〕 決意

朝の匂いがした。私は起き上がると、そろそろと窓辺に歩み寄った。窓は開け放たれていて、そこから流れ込む冷ややかな空気と陽光の温かさが心地よい。部屋を見渡すが、居るのは私だけのようだった。彼は一階だろうか？ 私は大きく伸びをすると、部屋を出て階下に下った。

台所では彼が一人で朝食を食べていた。トーストから漂う香ばしい香りが私の鼻をくすぐり、食欲を駆り立てた。彼は私の出現に気づくと、いつものように戸棚から皿を取り出し、私の分の食事を用意してくれた。彼が自分の席へ着くのを認めると、私は用意された食事にてくととく歩み寄り、食べだした。味は申し分ない。いや、食事が出してもらえただけで、満足だった。この家に来るまでの私の生活を思えば、こうして毎日きちんとした食事がありつけるということだけで既に好待遇なのだ。それに加え、彼と同室で食事をするなど、もはや至福といえる。幸福に満たされた室内で、私は今を噛み締めるようにして食事を口に運んだ。

——私がこの家に住んでから、はや一月が過ぎ去った。それはあつという間で、それでいて充実した月日だった。

この家の事情についても、凡そ認識できたつもりだ。それは見たり感じたりしたことからの推察だったり、あるいは日々を通して徐々に表面に現れてきたりものだ。

まずこの家には、私を除くと、只今中学生の彼と、恐らく大学生でいくらか年の離れた姉の二人だけしかいなかった。では両親は何処へ行ったという話になるが、何らかの事情があつてか、あるいは死去してしまったのか、どちらにしてもこの家に両親という者は存在していなかった。かといって金銭的に逼迫している様子でもなく、姉の方も今だ学生の身であるところを見ると、学校を辞めてま

で働きに出なくても姉弟二人食べていけるだけの余裕はありそうだった。そもそも家庭が貧しい状況なら、私なんかを自ら招きいれて――自虐のようだが――食い扶持を増やすようなことはしないはずだ。おそらく親の残した財産か何かがあるのだろう。

特殊といえる事情はもう一つある。厳密には、これは彼についてなのだが、どうやら彼は今現在言葉を話せない状況にあるという事だ。何故そうだと分かるかというと、まず第一に、ここに来てから今に至るまで、私は一度として彼が言葉を発している姿を目撃していないのだ。家の電話が鳴った時なども、彼は決して自分から出ようとせず、姉にそれを伝えるだけなのである。姉が不在の時はというと、留守番電話に切り替わるまで放置するという次第だ。そして第二に、彼は姉やその他の者と意思疎通する際、一切言葉を使わずに、筆談やジェスチャーのみを用いるのだ。基本的には首振りで肯定否定を表現し、委細な事柄を伝える場合は雑記長に書くといった具合だ。以上のことを踏まえると、彼は生まれつき、あるいは何らかの理由で言葉が話せなくなっているようだ。

大きな所だと、この二つが私が把握しているこの家の事情だ。事情とはいうものの、両親の不在のせいでふさぎこんでしまっているわけでもなく、彼の言葉の件にしても、別段生活に支障をきたしている様子はない。彼らは彼らなりに今の境遇を受け入れ、前に進もうとしているようだ。少なくとも、私から見た彼らは幸福そうに見えた。そしてその無垢な笑顔を見る度に、私もまた幸福を感じるのだった――

彼は食事を終わると食器を流しに運び、台所を後にした。一人残された私は、誰も居なくなった台所で黙々と食事続けた。

少しすると階段をドタドタと下りてくる音がして、それから間もなく、わずかに開かれた扉の隙間からテレビの音声が台所まで届いてきた。彼が居間に来ているのだろう。それで私は食べる速度をいささか速めた。彼が居間に控えているということは、おそらくも

う間も無くすると、？あの女が？来るだろうと思ったのだ。

意にあたって、数分後には玄関のチャイムが鳴らされた。玄関へ向う足音に次いで扉が開かれる音がした。そして「おはよう」といういつもの声。やはり「あの女」だった。私は一気に残りの食事を食べ終えると、玄関へ走った。丁度彼らも玄関を出るところだったので、私たちは一緒に家を出る形となった。

——私がこの家に来た時から、「あの女」は彼の周囲に存在していた。女は隣人という間柄を利用し、事あるごとに彼に馴れ馴れしく纏わりついた。あの女は巧みな手管で彼を誘惑しようする、極悪の妖女なのだと思った。そして私は彼が女に唆されぬ様、二人の間の縁を断ち切ろうと思い様々な悪戯を女に仕向けた。例えば、女の家の前に鳥や鼠の屍骸を放置したり、郵便受けに彼から離れるという旨の呪詛を綴った手紙を入れておいたりだ。私は近くに隠れ、女がそれらを見てどういう反応を示すのか見守った。しかし女の反応は私の予想に反したものだ。鳥や鼠の屍骸を前にした時、そのおぞましい光景に驚倒し逃げ出すと思いきや、なんとその女は家からスコップを持ち出してきて、おもむろに庭の隅に穴を掘り始めたのである。そして穴を掘り終わると、家の前に放置された屍骸を穴へと運び、土をかぶせ、手を合わせたのだった。また呪詛の手紙の時などは、例によって私が隠れて見張っていると、女が家から出てきて郵便受けの前まで歩み寄り、がさごそと郵便受けの中身を検め始めた。やがて女は郵便物に混ざった呪詛の手紙に気づいたのだが、一読するとそれを持って家の中に走っていった。そのまま様子を窺っていると、女は少ししてまた郵便受けの前に戻ってきた。そして郵便受けに何物かを入れたかと思うと、直ぐに家の中へ引き返してしまった。私は気取られぬよう郵便受けに忍び寄り、女が入れたものを確認した。なんと女が郵便受けに入れたものは、私が書いた呪詛の手紙だった。そして驚くべきは、その手紙の裏に彼女の

ものらしき文章が綴ってあったのだ。その内容を要約すると、自分が彼に対して、決して不純な考えで近づいている訳ではないという弁明と、自分の行為で私がひどく不快な思いをしたことに対する謝罪だった。私はそれを読んだ時、狐につままれたような気持ちに陥ってしまった。まるで女に対する憎悪を全て失ったかのように、ただただ呆然とした。それらの出来事から私は、女は私の考えているような人間ではないのかもしれないと思い始めた。そして今までの行為が、単なる私の一人相撲だったのかもしれないと思った。そうして私は女に対しての悪戯をこれで最後にしようと思った。

女は一連の出来事を、彼は勿論親などにも相談したりしていない様子だった。普通そういう話を相談されたら、親なら家の周囲を警戒したり、事が深刻だと判断した場合は警察に届け出るなりするはずだ。しかし女の両親の普段と変わらぬ振る舞いや、警官らしい人物が現場の視察に訪れないところから見て、周囲に打ち明けていないことは明白だった。おそらく女は一連の出来事を他言せずに自分の胸の内にしまっておくことしたのだ。その行動にはおそらく、事を大事にして被害が私に及ぶの防ぎたいという意が含まれていたのだろう。それで私は、とりあえずは女を信用することにした。これまでの言動や行動などから、女は信用するに値すると判断したのだ。無論女が彼をたぶらかさうものなら、今度こそ容赦はしないつもりだ。だがよくよく考えれば、彼があの子にたぶらかされるなどという心配など不要ではないか。なぜならあの子は、ドジで、おっちょこちょいで、泣き虫という、悪い要素が三拍子揃っているのだ。そんな女に彼が惹かれるなどとは到底思えない。初めから誘惑などというのは、無理な話だったのだ。そういうことで、私の監視のもとではあるが、女に彼との接触を許すことにした――

家を飛び出して向った先は近所にある公園だった。彼の家から歩いて十分ほどの距離にあるその公園は、私がこの町に來た当初か

ら愛用している馴染みの公園だ。朝の公園は人気もまばらで、見受けられるのはジャングルジムではしゃぐ登校途中らしき小学生の集団ぐらいだった。そんな彼らも一人が駆け出したのを合皮切りにばたばたと騒がしい足音を残して去っていった。そしてその足音の残滓のようなものが消え去っていくにつれ、静寂が園内をみたしていく。それが私の周囲にまで及ぶと、まるで時間の流れが緩まるような、不思議な感覚に見舞われた。

私はこのしんと静まり返った朝の公園の雰囲気が好きだった。人によって掻き回される前の瑞々しい空気は私に平静を与えてくれたし、この場所に来れば、例え一時だとしても様々な嫌な事柄から逃避することができた。それは私にとって、一日をリセットする為の大切な儀式の様なものになっていた。私は目を閉じまだ穢れていない澄んだ空気を肺いっぱいに取り込むと、古くなった自分を追い出すようにゆっくりと時間をかけてそれを吐き出した。

しばらく園内を歩いた後、私は公園を後にして次の場所へと向った。目指す所は最近見つけたお気に入りの場所だった。

住宅地から少しはずれたところに、山中へと向う私道の往来がある。鬱蒼とした森に挟まれたその道は、用あって山に入る者が使用する他は使われていない道だった。その往来沿いをしばらく進むと、車一台分程の幅しかない未舗装の山道への入り口が道脇に現れる。その辺りまで来ると既に人気というものがほとんど感じられず、辺りには森特有の黴びたような匂いが充満していた。私は山道に踏み入ると臆せず山道をどんどん奥へと進んでいった。耳に届くのは木が軋む音と鳥の囀りだけだった。やがて山道は終わりをむかえ、三十坪程の開けた場所にたどり着く。視界に入るのは積み上げられた丸太の山。そこは切り倒された木材の集積所だった。

周囲を取り囲む木々の中にぽつんと存在するその集積場は、まるでそこだけ切り取られた特殊な空間のようだった。切り開かれた土地を囲むように丸太の山が何箇所か点在している。最寄の丸太の

山に歩み寄ると、まだ切り倒して間もないのか、濃厚な木の匂いが鼻をくすぐった。私は丸太に寄りかかるようにしてその場に座り込んだ。森の中で切り開かれたその空間だけは、陽光を遮るものもなく温かな光がきらきらと降り注いでいた。こうしているとこの広い世界に唯一私だけが存在しているような錯覚に襲われる。その私も少しずつ大自然と一体化し、細かな粒子となって消えていくようだった。私が消えてしまったら彼はどう思うだろう？ 悲しんでくれるだろうか？ ふとそんなことを考えたが、麗らかな陽気と新木の心地よい香りに思惟する氣力を失い、私はしらずしらず眠ってしまった。

——一体どのくらいの間私は眠り込んでいたのだろうか。辺りはまだ明るかったが太陽は中天をとくに過ぎていたのもう午後だとはわかる。日が翳る前に森から抜けたほうがよいと判断し、私は集積所を後にした。

初めの公園に引き返し、時計台で時刻を確認した。……午後三時半。予定の時刻まで一時間程あった。到着までの時間を考えても十分間に合う。私は一日の最後を締めくくる為に目的地である神社へ向けて歩き出した。

一旦彼の家まで引き返すと、今度は公園とは逆方向へと向った。家の正面からみて右脇を通る坂道を上り、頂上付近で左手に折れて細い路地に入る。路地を進んで間も無く右手に神社の鳥居が見えてくる。それが目的の神社の入り口だった。私は鳥居をくぐって境内に進入した。そのまま神社の奥へと続く石段を登る。石段を登りきると周囲を草むらで覆われた拝殿が正面に現れる。私は拝殿の右側面へと移動すると、拝殿下から隠しておいた紺色のワンピースを取り出しそれを纏った。これで準備は整った。あとは彼の訪れるのを待つだけだった。私は拝殿の裏手にある町を見下ろすことのできる高台へと向った。その場所は夕刻の限られた時間、彼が承知して

いる普段の私ではなく、もう一人の、別人の私として唯一彼に面会できる場所だった。

——この場所に最初に訪れたのは、彼の家に住まうようになって間も無くのことだった。私がいつものように街をぶらついてから帰宅すると、偶然に自宅の玄関からこの場所へと向う彼を目撃したのだ。何処へ向うのだろうとこっそり後をつけてみたら、この場所にたどり着いたのだった。私は彼が何の目的で此処に訪れているのかを探るため、物陰に隠れ背後から彼の様子を窺った。どうやら彼は高台から望める景色を抱えたスケッチブックに描いているようだった。周囲には目もくれず、目の前の景色だけに集中して黙々と筆を動かしていた。彼が居なくなっただけに自分もその場所立ってみて分かったのだが、確かにその場所から見下ろす景色は絶景だった。そこからは彼の住む街の全貌と、その先の遥かな大洋が一望できたのだ。彼が描いてみたいと思うのも無理はないと思った。考えてみれば彼とはじめて出会った日も、彼は同じく筆を握っていたのだ。言葉話すことのできない彼にとって、絵を描くという行為はなにか特別な意味のあることなのだろうかと勝手に推察してみる。そうして私は次の日から彼が学校から帰宅する少し前にこの場所で彼を待ち受けるようになった。

私は彼の前に姿を現すとき、必ず紺色のワンピースを纏った。その理由は、普段彼が目に見ている私では無く本当の姿としての自分として彼と面会したかったからだ。矛盾するようだが、それを纏うことで偽りの無い自分を曝け出すことができたのだ。ワンピースは彼の姉のものをこっそりと拝借した。その服を選んだ訳は単に私の趣味に合うような色の服がその一着のみだったからだ。運良く丈も丁度良かったので、初見でそれに決めた。私はその紺色のワンピースを密かに持ち出し、神社の拝殿の下に隠した。そして彼に面会するときだけ取り出して纏った。

初めて彼の前に姿を現した時彼は一瞬驚いた表情を見せたが、別

段戸惑う風でもなくすぐに暖かな笑顔を浮かべ私を迎えてくれた。彼は隣りへどうぞというように手振りで私を促すと、それからまたキャンバスへと向っていった。私は彼の傍らに立ち、眼前に広がる景色へと臨む彼を、西日で全ての事物が朱色に染まりきるまでの間、ただ静かに見守った。別れの時間が訪れると、彼を神社の鳥居まで見送り、私も拝殿の下へ纏っていたものを戻してから、帰路に着いた。それから彼とその場所で過ごす時間は、私にとって、一日のうちで最も価値のある時間となった――

例によって、私は今もこうして彼の到来を心待ちにしていた。公園を発ってから三十分は経過しているはずだった。もう半時間ほどすれば彼は訪れるだろう。それまでは浮き立つ気持ちを抑え悠然と彼を待つことにしよう。

……しかし、優に一時間は経ったかという時間になっても、彼は未だ姿を現してはいなかった。日は刻々と落ちてゆき、辺りは次第に赤味を帯びていく。

彼がこの時間になっても訪れないことは今までに無いことだった。いつもなら多少前後したとしても十分程度の誤差だった。それがこの時間になっても訪れないということは、何か止むを得ない事情が発生したのだろうか。もしや彼に何か良くないことが起こったのではないか？ 杞憂だと思いたい。しかし私の脳裏に、彼の家に引き取られる直前の病院で過ごした日々の記憶が沸き起こる。そしてあの果てし無く落下していくような、絶望に似た感覚。気がつけば周囲の朱は鮮明さを失い、既に薄闇へ足を踏み入れている。私は待つことを諦め、彼の家へと走りだした。

家に到着するなり、私はリビング、次いで台所の順で室内へと駆け込み彼の姿を探した。しかし彼の姿は見当たらなかった。階下に彼が居ないことを確認すると、階段を駆け上がり一直線で彼の部屋へと向う。部屋の扉は閉ざされていた。扉の前に立ち、耳を澄ま

して部屋の内部の様子を窺う。物音は無く嫌なくらいに静まり返っている。、室内の照明も消灯されているらしく、上部に取り付けられた磨りガラスからは、ぼんやりとした暗闇が覗いていた。部屋にはいないのか？ ではないっただけに？ 私はひどく混乱した。家中を捜しても、彼の姿を捉えることができなかったからだ。

私が放心したように佇立していると、階下から彼の姉が現れた。「すずちゃん、あきは学校へ行って疲れちゃったみたいで、お部屋で眠ってるの。起こすと悪いから、下へ行きましょね。ご飯もできてるのよ」

私は階下へ下り、夕飯を食べた。私と姉の二人だけの食事だった。キッチンテーブルの彼の席には、ラップに巻かれた彼の分の夕飯が用意されていた。

彼については、姉の説明で、とりあえずは納得することにした。しかし、彼の顔を自分の目で確かめるまでは、手放しで安心はできない。食欲も出なく、姉には悪かったが、夕飯を半分ほど残してしまった。姉の方も彼のことに心配している様子で、食事を早々に終えると、食器を流しに運んでしまった。食器を洗っている最中も、表情からは憂いを見て取れた。

昨日の和やかさからは打って変わったような空気。家の中を、重々しい雰囲気支配していた。家族の絆が強固なほど、感情も伝播しやすいのだと思った。

彼の疲れている理由について考えてみる。夕食も食べず、風呂にも入らずに寝てしまうなんて、今までに無かった。しかも今日に至っては、あの高台にも現れなかったのだ。学校でなにか、思い悩むような出来事があったのだろうか？ 例えば……いじめ？ ……言葉を発せぬ彼なら、十分にありえる事だ。いじめを働く輩にとつて、そういう不具は恰好のいじめ対象になるだろう。とにかく、明日は朝から学校に行ってみよう。校内には入れないかもしれないが、外から見張ることは可能だ。加害者がいじめを実行するために、対

象を校舎の外に呼び出すということは十分に考えられる。明日は一日、学校に張り付いてみよう。

その日の夜は、姉がリビングに用意してくれた寢床で眠った。私は布団の中で、私の推論が当たっていた場合、どうするべきなのかを考えた。そして私は、ある一つの事を決意した。

〔秋人〕 選択

目覚めて時刻を確認すると、既に夜更けの時分だった。仮眠のつもりだったのだが、相当疲弊していたらしく、本格的に眠り込んでしまったようだ。今が十時だから、六時間も眠っていたことになる。

僕は今日学校から帰宅した後、姉に、疲れたので少し眠るという事を伝え、そのまま布団に入ってしまった。殆ど日課になっていた、高台でのスケッチには行っていない。というよりは、足を運ぶだけの気力が残ってはいなかったのだ。すべての事に対して億劫になり、ただひたすらに眠りたかった。言わば現実逃避だった。……あのワンプイスの女の子は、来るはずのない僕を、律儀に待ち続けていたのだろうか。そう思うと、申し訳ない気持ちになった。今度会ったとき、謝意を伝えなければならぬだろう。しかし、誰だって強請なんて事を仕向けられたら、現実から逃げ出したくなる。精神が削られてしまうのだ。心に相当な負担が押し掛かる。たとえ一時的でも、眠ることで全ての精神的苦悩から逃れたいと思うのは当然だ。

……そこで思い出す。奴らが要求してきた、三万円という大金。明日までに用意しろと言っていた。勿論、僕はそんな大金は持ち合わせていない。用意できたとしても、精々貯金箱に貯金してある一万円がやっただ。足りない分はどうすれば……。姉に相談はできない。唯でさえ失声症の事があるのに、それに加えて、姉の心配事を増やすような事はしたくはなかった。できれば内内で問題を処理したい。しかし、明日までに三万円なんて用意できるのだろうか。自分の貯蓄している額を差し引いても、残り二万円もある。自力では無理だ。となると、この家のどこかを捜すしかない。家中でまとまった金がありそうな所……。一つだけ……。ある。あるにはあるが……。

候補に浮かんだもの。それは台所の棚の中にある、配達荷物の支払いや、なにか緊急にまとまった金銭を必要とする時の為に用意

されている財布の事だった。だが、それに手を出すのはさすがに気がひけた。まず第一に、こんな汚い事の為に用意してある金ではない。それに、姉の承諾無しにそれを持ち出したとなれば、それはもう窃盗と変わらないのではないか。これでは、やっていることが奴らと大差ないのでは……。

しかし、他に状況を打開できるような方法は残されてはいなかった。結局のところ、僕に選択の余地はないのだ。僕は、お金は一時的に借りるだけで、事が済めば必ず返すという逃げ口上を作り上げ、良心の呵責を無理やりに説き伏せた。そして決心が鈍らぬうちに、財布の有る一階の台所へと向った。

部屋から歩廊へ出ると、家の中はおそろしく静まり返っていた。ちりちりとした沈黙が耳を支配している。同じ階に存在する姉の部屋を見ると、明かりが点いていなく、扉の輪郭までしか確認できなかった。。どうやら姉は、既に就寝しているらしい。私は足音を忍ばせ、闇の広がる階下へと下った。

降りてすぐ右手にある引き戸を、音を立てぬよう慎重に開け、台所へと進入する。姉を起こしてしまう恐れがある為、照明の類は一切点けなかった。それでも、台所のシンク上部にある窓から差し込む月光で、室内は真夜中だというのに、やけに明るかった。それは、照らされたハウスタストが視認できるほどだった。私は財布が入っている棚の所まで移動すると、一度その場で一呼吸置いた。相変わらず周囲は物音一つなく、僕の唾を飲み込む音さえもが、闇に吸い込まれていった。十分に気持ちが悪くなったことを自覚し、中にある財布に手を伸ばそうとした時、傍らに何者かがいる気配を感じ、驚愕した。

……見られている。一体いつから？ 私は恐怖で、体中から発汗しているのが分かった。気配のする方を振り向くのを、硬直した体が拒絶する。それでも私は意を決し、頭部の可動しない人形のそれを無理やりに捻るように、硬化した首を、強引にそちらに振り

向かせた。

はじめ、それが何なのか得体が分からず、私はぞっとした。黒い体は周囲を包む暗闇に同化し、ただ一対の目だけが光を放っていた。まるで、何者かの影だけが、本体から脱け出してきたようだった。目が暗闇に慣れていくにつれ、おぼろげだった姿形が、徐々に確認できるようになる。そして、月明りに照らされたそれが、全容を現す。そこには、飼い猫のすずが、こちらをじっと見据えたまま、佇んでいた。

僕達是对峙したまま、しばらく動かなかった。いや、僕の場合は、動けなかったと言ったほうが正しい。すずの視線には、視線をそらさせない、不思議な呪縛のようなものがあつたのだ。

物言わぬすずの瞳は、悲しみ、あるいは哀れみの情を僕に投げかけているように見えた。まるで、僕の内情が全て見透かされているかのようなだった。もしや、僕がこれから行おうとしていることも、分かっているのかもしれない。そう思うと、途端にいたたまれない気持ちになった。自分行おうとしている行為がものすごい愚行に思えてきて、行動に移すことができなかった。

僕は、すずに対する様々な念を振り払おうとした。猫がそんな風に、人間の感情や機微を察知できるはずがない。ましてや、人間の愚行を見咎るなどありえない。全ては僕の考えすぎで、それも精神が憔悴しているせいなのだ。しかし、いくら考えまいと努めても、何がしかを含んだすずのその瞳が覗く度に、再び自責の渦へと舞い戻らせられるのだった。やがてすずは居間の方へ歩いて去っていった。残された僕は、しばらくの間、途方もなく、ただ立ち尽くしていた。

翌朝、僕はいつもより若干早く起床し、昨夜入浴していなかった。ので、浴室でシャワーを浴びた。勢い良く噴出するお湯を頭に被りながら、昨夜のことを考える。

昨夜、結局僕は、棚のお金には手を出さなかった。つまり、奴らの要求に断固拒否する道を選んだのだ。勿論、報復を受けるのは、覚悟の上だった。例えば奴らに暴力を振るわれたとしても、良心に逆らい、精神的苦痛を抱え続けるよりは、遥かに良いと考えた。今回限りで、奴らとはきっぱりと縁を切るつもりだ。

昨夜のすずとの対面で、心境が変化したことは確かだった。あの時すずが現れていなかったら、僕は間違いなく、もう一方の道を選択していただろう。それ程昨夜の僕は、追い詰められていた。その点では、僕はすず感謝しなければならぬ。もしかすると、すずは本当に、僕の気持ちを讀み取っていたのかもしれないという気がした。帰宅したら、謝罪の意味も含めて、目一杯可愛がってやろう。

それと思う一つ、高台のあの子にも謝らなければならない。彼女には少なからず心配を掛けてしまった。彼女の前に元気な姿を示すと共に、昨日高台へ行けなかったことを謝ろう。彼女が僕の謝罪を受け入れてくれたなら、例によって、また彼女の傍らでスケッチに興じることができるよう。その時は、一度、全ての気持ちをリセットし、心機一転新しい一步を踏み出そうと思う。

脱衣所から着替えて出てくると、この時間帯なら凡そ寝ているはずの姉が、めずらしいことに起き出していた。かんかんフライパンをさばく音が響いている。どうやら朝食を作っているようだ。

「おはよう。あき、体調はどう？ ……だいぶ良くなったみたいね。顔色もいいし。お姉ちゃん、心配で早起きしちゃったの。今朝になっても体調悪そうだったら、学校休ませようと思って。でもその分なら大丈夫みたいね。今日は私がご飯作るから、もう少し待っててね」

どうやらもう一人、知らず知らずに心配をかけてしまっていた人物がいたらしい。とても申し訳ない気分になった。僕は目一杯の

笑顔で答え、朝食の準備を手伝った。

朝食がテーブルに並ぶと、二人向き合うようにして席に着き、挨拶をしてから箸をつけた。そこで、さすが姿を見せていないことに気づき、姉に尋ねてみた。

「すずちゃんならご飯も食べて、とっくに出掛けたわよ。空気を入れ替えるために、居間の掃き出し窓開けて置いたら、あきがシヤワー浴びてる時、そこから飛び出していっちゃった」

なるほど。どおりで朝から顔を見ないわけだ。昨日夜更けに起き出していたにも関わらず、相変わらず元気だ。僕も負けていられないなと思った。

朝食を食べ終えた僕は、自室で制服に着替えた後、居間に降りて葵が訪れるのを待っていた。間も無くして葵は現れ、僕達是一緒に玄関を出た。

道すがら、葵が呟いた。

「昨日、部活の友達から聞いたんだけど、最近学校で、上級生が下級生を脅してお金を巻き上げる事件があったらしいよ。その友達も被害に遇ったみたい。あきちゃん知ってた？」

僕は首を振り、知らないことを示した。

「そっか。でももしそういうことに巻き込まれそうになったら、私でも、他の人でもいいから、相談してね。あきちゃん、問題ごとを一人で抱えちゃうところがあるから」

僕は笑って頷いたが、既に被害に遇った事は伝えなかった。大丈夫、今日ですべて終わらせるのだから、余計な心配を与える必要はないだろう。

学校へ到着し、生徒玄関で葵と別れた。そのまま自分の教室へ向かう。

教室の扉を開け、自分の席にたどり着くと同時に、八木が声をかけてきた。

「よう秋人。お、調子よさそうだな。お前昨日の昼、倉庫裏では何もなかったっていったけど、正直俺、強請られたと思って疑ってんだぜ。お前、帰ってきた後ずっと、精神的にまいってる様に見えたし。もし、今日も呼び出しくらうようなら、俺はお前に着いて行くつもりだ。お前は金なんか払う必要ねえ。相手が掛かってくるようなら、俺が変わりにぶっ飛ばされてやる。こっちが殴ったって、どうなるわけでもないしな。とにかく、今日で終わらせるんだ。……だからなあ、本当のところを教えてくれ、本当に昨日、何もなかったのか？」

友人の温かい厚情には、頭が下がる思いだった。僕は帳面を鞆から取り出し、「心配してくれて、ありがとう。八木の心遣いはすごく嬉しい。けれども、昨日は本当に何もなかったんだ。もし、今後そういうことに巻き込まれそうになったら、真先に君に相談するよ。僕は良い友人を持って、本当に幸せだ」と書いて伝えた。

「そうか……。なら、もう心配はいらねえな。俺はお前を信じる。だから、もうこのことは忘れよう。それと、今日は、みんなと一緒に昼飯食えるんだろ？」

昼休みは、奴らとの決着をつけるために、体育倉庫へ赴く予定だった。なので僕は、「今日は葵と二人で昼食を食べる約束があるので、申し訳ないけど、みんなの輪には加われない」と嘘をついた。仕方のない事だが、やはり心が痛む。

「なるほど葵ちゃんか。それならしょうがねえな。それにしても、お前らほんとに仲いいよな。その仲の良さは、単に幼馴染ってだけなのか？　もしやお前ら……なんてな。冗談冗談。まあこっちのことは気にしないで、そっちで楽しくやってくれよ」

八木は僕のはにかんだ表情を見てぶっと吹き出すと、満足げに去っていった。僕は友人達気持ちを裏切らないためにも、昼で一切を終わらせようと胸のうちに思った。

憂いを抱えているせいか、午前の授業内容の殆どは頭に入らず、

気がつけば、昼食の時間を迎えていた。

僕は仲間に偽りの理由を告げ、奴らが待つ体育倉庫へと向った。場所に着いた時、まだ例の三人は不在だったので、何をするでもなく、奴らが訪れるのを待った

心持は不思議と落ち着いていた。この場所に訪れるまでは、不安や恐れが始終頭を捉えて離さなかったのだが、今に至っては、腹を決めてしまった為なのだろう。諦観に似た余裕さえ窺うほど、落ち着いていた。

十分ほどして、奴らは現れた。先頭に、一団のリーダー格と思われる、浅黒い肌をした神尾という男。その脇に、眼光鋭い、爬虫類のような目を持った、須田という男が並ぶ。最後に、中でも群を抜いて体格の良い、三田村という男が二人の後ろに続いた。それは、見紛うことなく、昨日面々だった。

「お、待っててくれたんだ。藤沢君だっけ？ 悪いねえ。まあここじゃあなんだから、とりあえず、裏へ回ろうか」

神尾に促されるままに、僕は一団について歩いた。

倉庫裏は相変わらず煙草の吸殻が地面に散乱し、ひどい有様だった。神尾と須田が、早速懷から煙草を抜き出し、紫煙を燻らさせ始めた。三田村はと言うと、誰か来たらすぐに知らせるようと、表の監視を命じられた。僕は身構えながら、ひたすらに煙を吐き出す二人を眺めていた。それか五分ほどして、神尾が吸い終わった煙草を地面に放り、足で踏み潰すと、ようやく口を開いた。

「それで、金は用意できたの？」

この前とは打って変わり、ぼかした表現から直接的な物言いへと変わっていた。ついに本性を晒したのだと思った。僕は首を横に振り、否定を告げる。

「はあ？ 明日までに三万持って来いって、俺言っただよなあ。まさか今更、やっぱり無理でしたーとか、言うんじゃないだろうな？」

僕は何も答えず、毅然として相手の眼を睨み付けていた。辺り

に張り詰めた空気が漂い始めるのが分かる。

「……なんだその眼は。お前、俺に喧嘩売ってんの？ ……：
まあ、俺だって仏心つてのがある。一日で三万つてのがきついな
ら、期限を延ばしてやる。……明日。明日までに、三万用意しろ。
それ以上は伸ばせねえ。どうだ、わかったか？」

大仰な動作で被りを振り、強く否定を宣言する。その瞬間に双方の意見は決裂し、場の緊張は飽和を迎えた。

「おい、三田村！ こっち来い！ ……こいつ殺されたいみたいだから、ちょっと痛めつけてやれ。手加減はいらねえ、あ、顔はやめとけよ。親や先公にばれたら不味いからな」

「はい」という返事とともに、大男の三田村が、ずんずんところらへ歩み寄ってくる。両脇は倉庫とフェンスに行く手を遮られ、背後には須田が立ちはだかる。逃げ場はなかった。僕は抵抗することを諦め、三田村向き合った。

間合いが、追いやれる様にして、相手の方から一方的に狭めらる。気づけば、手を伸ばせば相手に届く程の距離まで接近していた。少しの間の後、三田村の右手がグツとこちらへ伸びてきて、僕の制服の胸倉を掴みあげる。そのまま僕の体は数センチほど吊り上げられ、爪立ちの状態を強制された。捻りあげられた制服シャツが、僕の体重の幾分を背負い、きりきりと音を上げる。僕が呼吸をうまくできずに喘いでいると、三田村が、忍び声で囁いた。

「わるいな。俺も先輩にはさからえない。許してくれ」

一言の直後、彼の右足は地面を蹴り、次の瞬間には、僕の腹部に彼の膝が深く叩き込まれていた。視界が白光し、耳鳴り。脳を貫くような激痛が体を走る。その直ぐ後、過度の呼吸困難に陥ると、崩れるようにしてその場に蹲った。

口を大きく開け、強く酸素を求める。独りでに涙と鼻水が溢れ、顔を伝って落ちた。それでも僕は、何とか思考するだけの余力は残されていた。理性が頭に呼びかける。ここで屈してはいけない。喧嘩の勝ち負けが問題ではないのだ。毅然と立ち向かえ。

しばらくして、僕は多少の落ち着きを取り戻すと、ふらつく体をフェンスで支え、立ち上がった。顔を起こし、毅然たる表情を以って、三田村の眼を見据える。三田村は一瞬たじろぐそぶりを見せたが、直ぐに表情を引き締め、再び僕へ歩み寄った。彼の右手が大きく振りかぶられる。それでも僕は、決して、相手の眼から視線を離さなかった。振り上げられた彼の拳が、円弧の軌道を描き、再び僕の腹部を捉えたとき、鈍い痛みの後、すうっと、意識が遠退いていくのが分かった。

いつ倒れたのかも分からず、知らずに伏臥していた。目の前の景色がぼやけ、五感の機能が漸減していく。このまま意識を失ってしまうのだろうか。眼を閉じる。茫漠とした暗闇の中で、僕を呼ぶ声が聞こえた。……誰の……声……？

(……あきと、だ……？……ど……い……)

既に意識は、声の主を認識できない程に混濁していた。声は次第に届かなくなり、やがて僕は一人になった。周囲を壁によって隔絶された孤独。孤独を孤独たらしめている、壁。……壁を築き、他人を遠ざけているのは誰？ その時抱いていたのは、何故だか、謝罪の念だった。僕は急激な睡魔に襲われるようにして、意識を失った。

(あ………起……、あき………！)

呼びかける声がする。僕を呼んでいるのだろうか。僕は声の主を確認するために、重たい瞼をゆっくりと持ち上げた。

眼前に、二人の人物の顔が、僕をの覗き込むようにしてあった。一人は、目覚めた僕を見て安堵の表情を浮かべると、走ってどこかへ行ってしまった。もう一人は、目を赤く泣き腫らしていて、僕の半身を起こすと、そのまま抱き寄せた。

僕は二人を知っている。友人の八木と、幼馴染の葵だ。意識は次第に鮮明さを取り戻していくが、現状については依然として把握できないでいた。少しすると、八木が手に何かを持って戻ってきた。

八木がそれを僕の額に押し当てる。それは、水で濡らしたハンカチだった。

その後僕は、記憶の欠損などがないか確認する為の、いくらか質問を受けた。質問を受けている間中、僕は腹部のずきずきとした疼痛に苛まれた。質問を終えると、八木が詳細を説明してくれた。

「昼休みに入って、お前が葵ちゃんと飯食うって教室を出て行った後、おれはいつもの仲間と教室で飯を食った。それで、弁当だけじゃちょっと足りなくてな、購買にパンでも買いに行こうと思っただ。購買に行く途中、友達と話しながら歩いてる葵ちゃんを見つけた。俺は、秋人が一緒じゃないことを不思議に思っ、葵ちゃんに『秋人はどうしたの?』って聞いてみたんだ。そしたら葵ちゃんは、『あきちゃんがどうしたの?』って答えた。話が噛み合わないことに、俺は不信感を抱いた。まさか、と思っただけど、俺には心当たりがあっただ。昨日のお前の行動があっただからな。それで葵ちゃんに事情を説明したら、一緒に昼食を食べる約束なんてしていないことがわかった。不安になった俺が秋人を捜しに行くと言ったら、自分も同行すると言っ、二人で体育倉庫へ向った。そしたら、倉庫の裏で、三人組に囲まれて倒れているお前を発見したという訳だ」

八木の説明で、全てを思い出す。そうだ。僕は三田村に殴られ、気を失ったのだ。それで、僕が伸されるところに、二人が駆けつけてくれた。……すると、僕が気を失う間際に聞いたあの声は、二人が私を捜す声だったのだろうか。考えていると、葵が切り出した。

「私、心配したんだよ。最初、倒れてるあきちゃんを見たとき、思わず泣き出しちゃったもん。八木くんだって、三人組を止めようとして、殴られちゃったんだよ。その後直ぐ三人組が引き上げて行ったから良かったけど。後でちゃんと、八木くんに謝るんだよ。でも、無事でよかった。記憶もしっかりしてるみたいだし。……ねえ、私今朝、こういうトラブルに巻き込まれたら、誰でもいいから相談

してねって言ったよね？ そうしたら、あきちゃん、頷いた。なにどうして、相談してくれなかったの？ 私達、そんなに頼りないかな……。でもね、お願いだから、一人で解決しようとしなくていい。私達だって、きつと力になれることがあると思う。……だから……お願い……」

葵は全てを言い終える前に、堪えきれず泣き出してしまった。僕は二人にきちんと謝りたかったが、言葉を喋れない以上、俯くしかなかった。この時ほど、言葉が話せないことで歯痒い思いをしたことはない。結局のところ、自分が最善だと思い込んで選択した道が、二人をこの上なく傷つけてしまう結果に繋がってしまったのだ。八木は哀憐を含んだ眼差しでこちらを見つめている。僕はしばらくの間、さめざめと泣き続ける葵をみつめていた

〔少女〕 思惑

朝早く家を出た私は、彼の通う学校へと訪れていた。正門前には民家があり、庭に植えてある庭木の枝は、民家を囲うブロック塀から道路側へ飛び出すようにして伸びている。その庭木の茂みに隠れ、門を潜っていく生徒を眺めた。今のところ、彼は姿を見せていない。昨日の夜中の出来事を思い出す。目を閉じると、月明りに照らされた、彼のひどく思いつめた表情が刻々と浮かんでくる。彼はきつと、なにか大きな悩み事を抱えているのに相違ない。それを今日、私がつきとめるのだ。

しばらくすると、彼と幼馴染の女が、連れ立って姿を現した。女の話や、相槌を打ったりして聞いている彼の様子は、時折笑顔が垣間見えるなど、昨晚とは違い至って元氣に見えた。女と一緒のせいもあるのだろうか。やがて二人が門の奥に姿を消したことを認めると、私は生徒玄関が見通せる場所へと場所を移した。

校舎の周囲は金網のフェンスで囲われていて、校門以外からは敷地内に入れない。仕方なく、校舎西側にある林の陰から、生徒玄関を往来する者を見張ることにする。フェンスを跨いだ先には倉庫のような物が設置されており、そのさらに奥が生徒玄関らしかった。私のいる場所から生徒玄関までは、三十メートル程の距離があり、登校してくる生徒が、次から次と玄関の中へ入っていく姿が確認できる。しばらくその光景を眺めていたが、登校してくる生徒は徐々に数を減らし、ついにはぱったりと途絶えてしまった。その数分後に予鈴が鳴ったので、登校時間が終り、学校が始業の時刻を迎えたことを知った。校舎内の様子を知らないことがもどかしい。とりあえずは、彼らしき人物が玄関から出てくるのを見張ることにした。

見張りを開始して少しすると、運動着を着た生徒の集団が、玄関からぞろぞろと出てきた。三四十人程だろう。その集団の中に彼

が居ないかと目を凝らしたが、残念ながら見受けられなかった。彼が居ないことで、ほっと胸をなでおろしていると、生徒の何人かがこちらへ向って歩いて来た。気取られたのかと思い、身構えたが、どうやら眼前に置かれた倉庫に用があったようで、生徒らは倉庫に入り、中からなにやら持ち出すと、哄笑しながら去っていった。

その後も、玄関を行き来する者はしばしば現れた。それは学校の生徒だったり、先生だったりした。しかし、肝心の彼はというと、一度も姿を見せなかった。

何度か予鈴が鳴り、そろそろ正午だろうという頃。私は、今日はどう、彼は下校の時刻まで現れないのではないかと、諦め始めていた。再び予鈴が響き、校舎内から喧騒が漏れ聞こえてくる。どうせまた、知らない顔の生徒が出てくるのだろーと思ひ、気を抜いていた時だった。一人の生徒が玄関から出てきて、真っ直ぐこちらへ向って歩いてくる。それが彼に良く似た背格好だったので、もしかやと思ひ、そいつの顔を確認しようと身を乗り出した。

やはりそれは、私の良く見知った彼の顔だった。ついに彼が現れたのだ。悠然と歩く彼の顔には、なにか決意に満ちた表情が現れていた。一体こんな校舎の外れに、何のようなのだろう？ 私は再び身を潜めて、彼の挙動を窺った。

彼は倉庫の前まで来ると、一度周囲を見渡してから、何をするでもなく、斜め上の方を見つめる様にして突っ立っていた。何者かと待ち合わせだろうか。その後しばらくは、彼は相変わらず物思ひに耽るように、そして待ち人が現れることもなく、静かな午後の方が流れた。

十分ほど経っただろうか。玄関の方から、三人の男がこちらへ向って歩いてきたのが見えた。遠目にはわからなかったが、こちらへ近づくにつれ、そいつらの容貌が明らかになってくる。

三人組は、いかにも不良という風の、ガラの悪い男たちだった。身なりや歩き方、挙措などから、奴らの品位の程度が容易に想像できる。そいつらは下卑た笑い声を上げながら、のたりのたりとこち

らへ向って歩いて来た。私の心に、俄かに不安の影がさす。もしや、彼の待ち人とはあの不良集団なのだろうか？　できれば、あのような輩とは、関わり合いを持ってほしくは無いのだが……。しかし、昨日の彼の様子から察するに、なにか頭を煩わせる事態に直面している可能性が高い。奴らとの間に、何か厄介事が生じているという事も無きにしも非ずだ。ともあれ、もう少し成り行きを見守ってみる必要があるだろう。

――三人組は倉庫の前まで来ると、たたずむ彼に向って何かしらの声をかけた。言葉の内容までは聞き取れなかったが、少なくとも彼らの間に、友好的な雰囲気は感じ取れなかった。それにしても、やはり彼の待ち人とは、この不良共だったようだ。なにか良からぬ予感に、胸騒ぎを覚える。私はそれから、緊張した面持ちで彼らを見守った。

彼は三人に先導され、倉庫の裏へと回った。その後、三人組の中でも一際でかい大男が、表に出て行き、玄関の方を見遣っていた。見張りだろうか。だが、残りの二人はというと、彼を差し置いて、暢気に煙草などを吸い始めた。一体やつらの目的はなんなのだろうか？　まさか、唯単に隠れて煙草を吸いにきたわけじゃあるまい……。

――頻り一服すると、二人のうちの一人、黒い肌の男が、ようやく彼に声をかけた。これから本題に入るのだろうか。しかし、やはり内容は聞き取れない。

彼は不良の何らかの問い掛けに対し、首を横に振った。否定の意だろうか。すると、彼のそれを見るや否や、不良の態度が、あからさまに怒気をはらんだものに変わった。彼からの返答が不服だったのだろう。射竦めるようにして、彼を威圧した。

不良は彼に対し、何かを言い立てるが、彼は依然として、じつと不良を見据えたまま、微動だにしない。不良は一呼吸置き、再び何事かを問い掛けた。しかし、それでも彼は、首を振ってそれを否定した。その瞬間、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、不良はひどく激昂した様子で、怒声混じりに何事かを叫んだ。すると、表で見張

りをしていた大男が、倉庫裏の方へ戻ってきた。どうやら、大男を呼びつけたらしかった。

大男が傍まで来ると、黒い肌の男が何かを伝える。大男はそれに頷くと、彼の方に向き直った。彼と大男が対峙する。場は一触即発の様相を呈し、その張り詰めた空気は、こちらまで伝わってくる程だ。只ならぬ空気に、私は固唾を吞んで見守った。

大男はじりじりと間合いを詰めて行く。彼の背後には、目つきの鋭い別の不良が立ちはだかり、逃げ道を塞いでいた。逃げ場を失った彼は、瞬く間に間合いを詰められていく。そして、大男はそのまま彼を至近距離まで追い詰めると、彼に向って手を伸ばし、胸倉をぐいと掴みあげた。彼の身に危険が迫るのを感じ、私は息を呑んだ。自分のことのように、身体が強張る。

大男が胸倉を掴みあげた状態で、彼に何かを呟く。直後、大男は彼の腹部に、加減無しの膝蹴りを放った。途端に、彼が腹部を抱えるようにして蹲る。

それを目撃した瞬間、私に全身が総毛立つ程の怒りが沸き起こった。即刻にでもここから飛び出し、彼を助けに行きたい衝動に駆られる。しかし、これほどまでに怒り狂う状態にありながらも、私の頭の中の冷静な部分が、その軽率な衝動をすんでのところで抑止する。

……冷静になれ。ここで私が勇み立ってどうなるというのだ。返り討ちにあうのが関の山だ。今は堪えるのだ。昨夜、こういう事態が起きたときの為に、心内に計画した事があるではないか。それを不意にしないためにも、今は歯を食いしばり、堪えるしかない。

フェンスを支えに、彼がよろよろと立ち上がる。こんなに痛めつけられても尚、大男を睨み付ける彼の双眸。もういい。そのまま倒れておけばいいのだ。立ち上がる必要などない。お願いだから、それ以上無理しないで。気づけば、私は涙を流し、心の中で彼に哀願していた。

再び立ち上がった彼に、大男がずんずん近づいていく。そして

大きく被りを振り、再び彼の腹部へ拳を叩き込んだ。彼は苦しげな呻き声をあげ、力尽きたように、地面に崩れ落ちた。大男がそれを無感情に見下ろす。

眼前に展開される、あまりにも無慈悲で一方的な暴力を、私は切歯扼腕し、見守る他なかった。私は自分の無力さを呪った。すぐ目の前で苦しんでいる彼を、助けてやることすらできないのだ……。

その時、倉庫の向うから、何者かが、彼の名を呼ぶ声が響いた。見ると、男女が二人、こちらに向って走ってくる。男女は倉庫の前まで来ると、間髪いれずに裏へと回ってくる。そこでやっと、二人の顔が確認できた。

女の方は見覚えがあった。それは、彼の幼馴染で、隣家に住む女だった。女は彼を見つけるや否や、傍らへと駆け寄り、頻りに彼の名を呼んだ。男の方は見知らぬ顔の学生だった。学生は彼と大男の間に入り込むと、両手を広げて大男と向かい合った。彼を庇おうとしたのだろう。すると、後ろの方で事態を静観していた目つきの鋭い不良が、邪魔をするなど言わんばかりに学生に歩み寄ると、そのまま胸倉を掴み、殴り倒してしまった。その後、黒肌の不良が、興ざめたかという風にしかめた表情を浮かべ、不良二人に何やら指示すると、三人して引き上げてしまった。

――三人組が去った後、学生と女は、倒れている彼の傍に付き添い、介抱し続けた。しばらくの間、彼は倒れたまま呻き声を上げていた。その間、女は泣きじゃくり、彼の名を呼び続けた。学生は慣れぬ状況にひどく狼狽し、辺りをおろおろといたりきたりしていた。それから一時して、彼は目を覚ました。彼が無事なことに、心の底から安堵した。

彼と初めて出会ったとき、私は彼の笑顔の為に生きようと心に誓った。そして今、その誓いを果たすときが来たのだと思った。私の心の中には、どす黒い殺意の感情が渦を巻いていた。私はその瞬間、昨夜考えた計画を実行に移すことに決めた。

彼と友人達が校舎の中へ戻って行った後、私は高台のある神社へと向った。拝殿に辿り付くと、縁の下に隠してある紺色のワンピースを引っ張り出し、それを纏う。そしてその足で、再び学校へと引き返した。

夕刻、予鈴が響きわたり、続々と生徒が下校していく。私はというと、正門前の民家の茂みに隠れ、正門を出て行く者を見張っていた。

下校していく者には、友人達と談笑する者、あるいは、おどけて見せる者等が見られた。皆それぞれに無邪気な笑顔が浮かび、それはとても幸せそうに見えた。

下校生徒を見張り始めて少し経った時、彼が正門へ向って歩いてきた。傍らには昼に見た友人の姿も見受けられる。

彼らは正門を潜ると、そのまま彼の自宅がある方向へと歩き去ってしまった。それを見届けると、周囲に見咎める人がいないことを確認した上で、茂みから脱け出した。いよいよ、動き出す時が来た。

正門をくぐり、校内の敷地へと入る。校庭には、下校する為に正門へ向う生徒や、部活動に勤しむ生徒が見受けられた。指定の制服やジャージに混じって、この紺色のワンピースはやはり目立つよううで、すれ違う人からは、好奇を含んだ視線を向けられた。ここでは目立ちすぎる。話を聞くにしても、もう少し人が少ない所にしよう。そう思い、とりあえず私は校舎へと向った。

生徒玄関で、靴を履き替えている生徒がいた。眼鏡を掛けていて、背が低く、挙動を見るからに、気弱そうな生徒だった。いかにも奴らの標的にされそうなタイプだ。私はその生徒に近づいていき、話しかけた。

「君。すまないが、少し尋ねごとをしてもいいか？」

男は靴を履くために下を向いていた顔を上げた。すると私の姿を確認した瞬間、急に動揺したそぶりを見せた。彼は動揺を押し隠

すように話し始めた。

「は、はい。なんででしょう？」

「この学校に、強請りやたかりを働く悪漢がいると聞いたんだが、その事について、君はなにか知っているか？ 私はそいつらと話をしにきたんだ」

男は一瞬驚いた表情を見せると、直ぐに気まずそうな顔になり、途端に沈黙した。きっとなにか知っているのだろう。

「君に心当たりがあるのなら、私に教えてほしい。別に、それを教えたからといって、君に害が及ぶわけではない。勿論、君が情報を私に教えたことは誰にも言わない。どうか被害者のためだと思って、教えてくれないか？」

男は少しの間逡巡した後、人目につかぬ所へ移動しようという、玄関を出てすぐ脇の花壇のところへ場所を移した。そして誰も聞きとがめる人がいない人がいない事を確認すると、おずおずと口を開いた。

「率直に言うと……知ってます。彼らは……ああ、強請りをする人っていうのは三人組なんです。彼らはここ数ヶ月、校内で手ごろそうな標的を見つけては、脅しつけて金を奪ってるんです。……実は、僕も被害者で、半月ほど前に、金を脅し取られました。多分今までの被害者を合計すると、十人以上はいると思います。漏れ聞いた話から、推測しただけですけどね。彼らはいつも三人でつるんでいて、メンバーは三年の神尾と須田、二年の三田村です。中でも二年の三田村って奴が飛びぬけてでかいです。慎重百八十近くあるかも。でもそいつは自分から暴力振るったりはしません。指示を出すのは大抵三年の神尾って人で、三田村は神尾に命令されて動きまです。同じ三年の、須田という人は、何もない限りは外から見ただけって感じです。僕のと時も、ただ見てるだけでした。でも噂だと切れると一番怖いらしいです。……僕の知ってることは大体述べたと思いますけど、他に聞きたいことは？」

「三人組については大体わかった。それで、その三人組は今も

校内にいるのか？ いるならその場所を教えてください」

「聞いてどうするんですか？ 見たところあなたはこの学校の生徒じゃないようですね。、なら、あいつらと係わり合いになるようなことはしないほうがいいですよ。ましてや女の子がそんな物騒な話に首を突っ込むなんて……」

「大丈夫。別に喧嘩しにいくって訳じゃない。ただそいつらと話がしたいだけなんだ。うまくすれば、話し合いで解決できるかもしれないよ」

「話し合いなんかで納得してくれるような輩じゃないですよ……。僕だって、物騒な例えですけど、殺してやりたいくらい奴らが憎い。でも、結局は泣き寝入りするしかないんです。先生や親に相談なんてできないですよ。そんなことが奴らにしたら、きつと報復されます。そう思うと。とても誰かに相談なんてできません。……あなたはそんな奴らと自ら関わろうとしているんですよ。考え直した方がいい」

「危険なことは十分に分かってる。……実は私の友人も、奴らの被害者なんだ。直接見たわけじゃないけど、偶然うわさを耳にしてね。それで私は、その友人を助けてあげたいと思った。それでこうして、直談判するために態々この学校まで出向いてきたんだ。だからどうか、私の気持ちを汲んで、協力してほしい。たのむ」

私は頭を下げて頼み込んだ。

「そ、そんな！ 教えますから、頭を上げてください。貴方の気持ちは良く分かりました。……しかし、ご友人はお気の毒に思いますけど、その話はそこで終わらせておくべきだったと思います。僕が居場所を教えたことで、あなたがこれからどうなろうと、私は知りませんよ」

勿論、話し合いで解決しようなどと、甘っちょろいことは考えていない。いや、もはや私の怒りは、話し合いなどでは収まらぬ地点にまで達していた。

男は、三人組のリーダーである神尾を説き伏せることができれ

ば、あるいは強請りをやめさせられるかもしれないといった。そして神尾が今いるという場所を教えてくれた。神尾は以外にも部活動に所属しているらしく、部はバスケットボール部とのことだった。活動は体育館で行っているらしいので、私は礼を言っ、体育館へ向った。

体育館では様々な部活が行われていた。奥のほうに、男子バスケットボール部の姿が見える。私は入り口から目を凝らし、活動しているバスケットボール部の部員の中から、神尾らしき人物を探した。神尾の顔は覚えている、黒い肌も特徴の一つだ。その二つが合致する人物を探す。――いた。コートから外れたところに、壁に背をもたれて座っている。さて、どうして呼び出したものか。考えていると、何の部活かは分からないが、丁度入り口近くでストレッチを行っている者がいたので、そいつに取り次いでもらうことにした、声を掛けて呼び寄せる。

「あのーなんででしょう？」

「部活動中にすまないね。お願いがあるんだけど、バスケ部の神尾って人を呼び出してくれないかな？」

「え、神尾さんですか？ ……はあ。わかりました」

生徒は露骨に嫌な顔を見せたが、渋々ながらも頷いて神緒の元へと歩いていく。数分後、神尾が現れた。

「お、なんだすげー可愛いじゃん。君どこ中？　つか、俺になんか様なの？」

こいつが彼を災いをモタラシタ元凶、神尾。今すぐにでも殴りかかりたい気持ちを抑え、勤めて懇懇に話しかける。

「部活動中にお呼び出して誠にすみません。始めまして。私、鈴音　凜と申します。今日はあなたにお話があつて参りました。早速ですが、そのお話というのは、私の友人の話なのです。私の友人で、貴方には是非一度お会いしたいと申してる者がいます。できることならば、その友人と一度会って頂きたいというお願いなんです。

もし都合がよろしければ、今日にでも会って頂けませんか？」

「全然OK！ あんたの友人ならさぞ可愛いんだろうね。でも、部活終わってからね。それでその人は今来てるの？」

「いいえ。ここには私一人しか来ておりません。この後友人に了承を得たことを伝えますので、場所と時間を決めて待ち合わせるということにいたしましょう。それと……、その友人というのが人一倍恥ずかしがり家さんで、できればこちら三人、そちら三人の三対三でお会いしたいとのことでした。なので、神尾さんの御友人の須田さんと三田村さんも呼んで頂けたら嬉しいのですが。こちらも三人で参りますので」

「須田と三田村の事まで知ってるんだ。まあいっか。了解。あいつらには俺から連絡しておくよ。それで待ち合わせ場所と時間は？」

「今夜10時、北谷公園入り口の外灯前で」

〔秋人〕 自責

結局のところ、僕や友人たちにとって、どうすることが一番良かったのだろうか？

学校からの帰り道、僕はそんなことを考えていた。昨日から今日に掛けて起こった出来事についてだ。最良だと思って選択した事が、なんとも後味の悪い結果を残してしまった。八木と葵を巻き込んでしまったことは、本当に申し訳なく思う。

「なあ、そんな顔するなよ。あいつ等とは今日できっぱり縁を切った。もう終わったことなんだ。だから気にすることなんてないんだぜ」

傍らを歩いていた八木が僕を元氣付けてくれた。八木は僕とは帰る道が違うのだが、心配性の葵からのたつての希望で、今日だけ僕を家まで送ってくれることとなった。

「でもお前が俺に嘘をついたのだけは、ちょっとだけ心外だな。俺って案外信用されてねーのな。なんて」

八木が小さく零す。あれも、八木を巻き込みたくなかったからこそその所為なのだ。そう、自分の口から弁明したかったが、できるはずもなく、むなしく沈黙が流れる。

「……俺に迷惑掛けたくないとか考えたんだったら、そんなの余計な世話だ。俺は友達からの相談なら、どんな悩みだって喜んで引き受けるぜ。というか、迷惑掛けられるのが嫌なら、初めから友達なんてやってねーよ」

八木のその一言に、ハツとする。同時に、熱いものがこみ上げた。傍らを振り向くと、八木は照れくさそうに頭をかいていた。気がつけば、自宅はもうすぐそこだった。

「じゃあまた学校でな。あんま葵ちゃんに心配掛けんなよ」

八木が手を振り、去っていく。僕は手を振り、それを見送った。僕は誰かに何かを相談するということが、その人に厄介事を持

ちかけることだと考えていた。しかしどうやらその考えは、間違っていたのかもしれない。八木の優しさには、そう思わせるものがあった。もし僕が誰かにこの事を相談していたならば、あるいは結末は変わったものになっていたかもしれない。

幾分か晴れた心持で、家の鍵を開けた。そして思う。今日こそは高台に赴き、あの子に謝ろう。それで一連の出来事に区切りをつけるのだ。

僕は部屋に鞆を置くと、スケッチブック片手に走り出した。

神社に辿りついた時には、僕はぜいぜいと激しい呼吸を繰り返していた。あの急な坂道を一度も休まずに走ってきたからだ。それというのも、一刻も早くあの子に謝りたいという気持ちからの衝動だった。

呼吸が落ち着くのを待ってから、拝殿の裏にある開けた場所へと向った。背の高い草を書き分けながら進み、草むらを抜けると、いつ見ても惚れ惚れするほど美しい景色が出迎えてくれた。しかし、そこにあの子の姿はなかった。いつもなら私がここへ訪れたときにはいるはずなのに、今日に限っては、姿を見せていなかった。

まさか、昨日僕が来なかったことで、彼女の気持ちを損ねてしまったのだろうか。このまま二度と現れないということもあるだろうか。僕は、取り返しのつかないことをしてしまったのではないかという、後悔の念に駆られた。せめて、謝罪の気持ちを伝えさせてほしい。彼女を欠いた景色は、先ほどと打って変わって、途端に色あせて見えた。結局あの子は訪れず、僕は日が暮れるまで、一人っきりで景色に向って筆を走らせた。

帰宅した僕は、悄然とした気持ちを引きずったまま、夕食に臨むこととなった。姉と席を並べる手前、僕は勤めて元気な素振りを示した。もう姉に余計なことで心配を掛けるようなことはしたくなかった。姉は僕の昨日とは違って元気そうな姿を見て、安心したよ

うだった。食事は和やかに進み、その雰囲気がいそいそで、先ほどの心痛い出来事が薄らいでいき、少しずつだが元氣を取り戻していた。そんな折、姉がこんなことを呟いた。

「そういえば、すずちゃんがまだ帰ってこないの。いつもなら帰ってきてるはずなのに、おかしいわね。ご飯だってたべてないはずなのに」

その言葉で思い出す、昨夜の不可思議な出来事。何か物言いたげに投げられた、すずの視線。しかしあの出来事が、たった今すずの帰りが遅いということと関係するのだろうか。いや、多分僕の考えすぎだろう。無理に関連付ける必要はない。それよりも、今日はすずとたくさん遊んでやる予定だった。しかし、まだ帰ってきていないのでは、それもできない。一体こんな時間に、何処で何をしているのだろうか。この時間になっても帰ってこないことはいままでも一度もなかった。それ故、きちんと帰ってくるのかと不安になる。その時、なぜだか不意に、高台のあの子のが頭に浮かび、頭の中ですずの虚像と重なった。しかしそれは直ぐに、姉の発言と共に掻き消えた。

「まあ猫はきまぐれだっていうしね。今日戻らなくても、明日の朝にはお腹が空いて帰ってくるでしょう」

僕は夕食を終えた後、直ぐに風呂へ入った。もしかしたら僕が入浴してる間に、すずが帰ってきているかもしれない。そんな淡い期待を抱きつつ、風呂から上り、髪を乾かし、居間へと向った。しかし、そこにすずの姿はなかった。明かりだけが存在し、音が吸い取られたようにしんとした居間。姉は自室へ戻ったのか、居間には誰もいなかった。二十センチばかり開かれた掃きだし窓から、冷やかな空気が入り込んでいる。窓の前に立ち、隙間から外の景色を眺めた。窓の向うには見渡す限りの黒が広がり、あらゆる物を闇へと溶かしていた。やはり今日は帰ってこないのだろうか。僕はしばらく外を眺めた後、諦めて窓を閉めて居間の電気を消し、自室へと

向った。

自室に入ってから、明日の予習をする為、机へと向った。勉強道具を机上に広げ、ペンを握る。しかし、すずのことや、最近起こった様々な出来事が頭をめぐり、思考を妨げた。とてもじゃないが勉強できるような状態ではない。十分ほど頑張ってみたが、どうにも続きそうにないので、僕は予習を諦めて、明日の準備をし、明かりを消して布団に潜り込んだ。

恐らく、最近色々な出来事が立て続けに起こってせいで、僕は疲れているのだ。今日はゆっくり休んで、明日からまた、リフレッシュした気持ちで頑張ればいい。すずだって、明日の朝になれば、何事もなかったかのように顔を出すだろう。朝になれば何もかもいい方向に動き出すはずだ……。

張り詰めていたものが緩んだせいか、布団に入ってからいくらかも経たぬうちに、僕はまどろみへと沈んでいった。

何かの音で、僕は目を覚ました。頭上に手を伸ばし、時計のバックライトを点灯させる。見ると、夜中の十一時になるうとしていた。真っ暗な室内は静まり返り、音の気配は過ぎ去っていた。一体さっきの音は、何の音だったのだろう。気のせいではない。確かに、コツツという音がしたのだ。

音に心当たりがないか思い返していると、再び音が室内に響いた。僕は驚き、勢い良く音のした方を振り向いた。音は一度きりで、室内は再び静寂に包まれてた。音の聞こえた方向には、カーテンの閉められた窓あった。先ほどの音から察するに、どうやら、窓になにかがぶつかった音らしい。音を立てぬよう布団から脱け出し、恐る恐る窓へと近づく。すると、再び窓に何かがぶつかる音。続けて、ぶつかった何かが窓下の屋根をカラカラと転がって落ちる音がした。何者かが、小石か何かを窓にぶつけている？　しかしこんな夜更けになんたってそんなことをするのだ？　私は俄かに恐怖を覚えたが、

なにか自然的な理由で音が発生しているということも有り得ると考え、とりあえずは勇気を出して外を確かめてみることにした。そして、僕は部屋の明かりをつけて、カーテンを開けた。

一瞬、どきりとする。目の前に、人が立っているように見えたのだ。だが良く見れば、それは窓に反射した自分の姿だった。あたりまえだ。ここは二階なのだから、窓の外に人が立っていられるはずはない。気を取り直して、窓周辺を見渡してみたが、特に以上は見当たらない。自然的な理由ではないのだろうか。次に窓の向うを見る。正面の見下ろした所には狭い道路が通っていて、真っ暗闇の世界で、唯一道路わきに設置された電灯だけが、弱弱しい白光を点していた。そして、その明かりに照らされて、電灯の元に誰かが居た。シルエットからすると、中学生くらいの女の子。よくよくみれば、烏羽色のワンピースを纏った、見覚えのある姿。窓を開けて、じつくりとその人物を確認する。まちがいない。電灯に浮かび上がった姿、それは、高台のあの子だった。

彼女は物言わず、唯じつと、こちらを見つめていた。突然のことに面くらい、僕はしばらく動けなかった。しばらくその状態が続き、やがて思い出した。そう、僕には彼女に伝えなければならぬことがあるのだ。窓から離れ、棚ベツト脇へと向う。引き出しを開け、中からスケッチブックを取り出す。そして真っ白なページに、謝罪の言葉を書き込む。描き終えると、窓まで歩み寄り、彼女に向かってスケッチブックを突き出した。

『昨日は高台に行けなくてごめんなさい。明日また、いつもの時間に待ってます』

それを見た彼女は、笑って首を振った。それは全然気にしていないといった素振りだった。そして、電灯に照らされた彼女の頬には、きらりと光るものがあった。そう、彼女はなぜか泣いていた。

僕は、その涙の理由を図りかねた。やはり昨日のことを気にしているのか？　僕が考えあぐねていると、彼女は唐突に、「さようなら」と一言だけ呟き、駆け出した。僕は暗闇に走り去る彼女の後姿を眺めることしかできなかった。そしてこの時ほど、言葉を話せないことがもどかしいと感じたことは無かった。

「少女」 離別

夜中の十時少し前、私は待ち合わせ場所である北谷公園の園内に身を潜めていた。神尾という男には入り口の外灯前と伝えてあるので、園内までは入ってこないだろうと判断し園内から入り口を見通せる範囲に身を潜めることにしたのだ。

夜の公園は初めてだったが、これはこれでいい物だなと思った。昼間の賑わいとは正反対の、まるで無人の廃墟のように人氣の消えた公園。外灯に集まる蛾や昆虫だけが、かつかつという音を立てていた。

時計台で時刻を確認する。ちょうど十時を回ったところだった。そろそろ奴らが現れる頃だろうか。しばらく待っていると、遠くからかましい話し声が聞こえてきた。どうやら奴らが現れたらしい。私は見つからぬように身を隠し、入り口へ耳をそばだてた。

「おい、いねえじゃん。神尾、本当に女三人くるのかよ？」

「本当だって。ちゃんと須田と三田村も呼んでくれって、名指しで言われてるんだからな。多分遅れてるだけだろ」

「楽しみだなあ。でも神尾さん、なんでその人は、僕や須田さんまで呼んだんですか？」

「いやなんかな、俺に会いたって奴がものすごい恥ずかしがり家らしくて、一対一じゃ恥ずかしいから、三対三で会おうって言って来たんだ。でもそのお蔭でお前らも呼んでもらえたんだからな。俺に感謝しろよ」

「はい、ありがとうございます」

「うーん、俺はなんかしっくりこねえな」

聞き覚えのある声、物陰から彼らの姿を確認する。間違いない、今日彼をいじめていた三人組だ。律儀にも、女三人が現れるのを待っている。しかしいくら待っても彼女らが現れることはない。なん

たつて、あれは彼等を誘き出す為のまったくの嘘なのだから。

さて、これからが本番だ。奴らに制裁を加えるのだ。彼の受けた痛みを、死を以って償ってもらおう。私は手にしたナイフを握り締めた。

私が勢い良く物陰から姿を現すと、彼らは物音に気づき、一斉にこちらを振り返った。

「あれー？ 来てたんだったら声掛けてよ！ 隠れるなんてひどいなー。もしかして悪戯のつもり？ えっと名前……凜ちゃんだっけ。君しかいないようだけど、他の二人は？」

私は何も答えない。ただじっと三人を見据える。場に沈黙が流れる。

「神尾、あいつ様子がおかしくないか？ それにあいつが手に持ってるの……ナイフじゃね？」

精神を集中させると、私は深く息を吸い込んだ。そして、矢庭に、三人目掛けて走りだした。

「やべえ！ みんな逃げろ！」

先頭にいた神尾の心臓目掛けて飛び込んでいった。しかしナイフは寸でのところでかわされ、腕に浅い傷を作っただけだった。

「ぐっいてえ！ くそっ！ 腕をやられた！ 三田村、そいつをなんとかしろ！」

「え！ だ、だって神尾さん。あいつナイフを持ってるんですよ！ 無理ですって……！」

神尾の前に出された三田村にむかって、すたすたと近づいていく。今度は確実にしとめるつもりだった。

「ああああ、ご、ごめんなさい！ 許してください！ お金がおほしいなら出しますから！」

三田村が命乞いをしたが、許す気は毛頭なかった。

「随分虫のいい話だな。残念だが、お前らがしてきたことは、

こんなものじゃ償えない。皆の痛みを知れ」

そう言い、ナイフを構える。狙いを定め、飛び込もうとした瞬間、背中に激痛が走った。ゆっくりと振り向くと、顔を蒼白にした須田が立っていた。そしてその手には、血濡れのナイフ……。

「お……俺……刺ししまった……人……人……なあ神尾……どうしよう」

「きゅ、救急車呼びましょう！」

「ばかやろう！ そんなことしたら俺たち捕まっちまうだろ！ 逃げるんだ！ おい三田村、須田は気が動転してるみたいだから、お前がつれて走れ！ いくぞ」

呆然とする私を尻目に、三人は逃げていった。残された私は、全てが台無しになってしまったことで、頭が真っ白になってしまった。

背中 of 傷口から血液が流れ出し。徐々に体力を奪っていく。計画は失敗したのだ。彼には申し訳なく思う。復讐を遂げることができなかった。しかしもう、後戻りはできない。

これからどうしよう……。そうだ……最後に彼に、さよならを言わなくては……。

私は鈍りはじめる体を引きずり、彼の家へ向けて歩き出した。

十分くらいして、私は彼の家の前に到着した。しかし、彼の家の明かりは消えていた。多分もう二人共寝てしまったのだろう。けれども私は、諦めることができなかった。いなくなる前に、どうしてもさよならを言いたい。私は道端の小石を拾うと、余力を振り絞り、それを窓目掛けて放った。どうか気づいて欲しい……。

なんだか窓に当たったが、彼が起き出す気配はない。やはりだめなのか……。諦めかけたとき、唐突に、彼の部屋の電気が点いた。直後、カーテンが開かれ、窓越しに彼の姿が現れた。どうやら、ま

だこちらに気づいていないようだ。見当違いの場所ばかりを探して
る。だが少しして、やっとこちらの方に目を向けた。彼は私の存在
に気づくと、窓を開け、驚いたようにこちらを見つめていた。私た
ちはそれから、しばらくの間見詰め合った。彼の顔を見られるのも
これが最後だと思うと、途端に涙が頬を伝った。私は背中が痛
むのを強いて堪えていた。最後は笑顔でお別れしたいと思ったから
だ。

見詰め合った後、彼は急に部屋の中へ引っ込み、少しするとま
た戻ってきた。その手にはいつものスケッチブックが掲げられてし
て、そのスケッチブックには、「昨日は高台に行けなくてごめんな
さい。明日いつもの時間に待ってます」と記してあった。彼のせい
ではないのだ。私は首を振り、気にしていないことを告げた。彼は
悪くない。悪いのは全部、あいつらなのだ。でも許して欲しい。今
日私は奴らに復讐を果たすことができなかった。名残惜しい気持ち
を振り切り、私は告げた。

「さようなら」

その一言を告げると、私は走り出した。闇の中を、あの高台へ
向って走った。傷口がずきずきと痛み、意識が朦朧としてくる。急
な坂に出ると、ぜいぜいと息を切らし、立ち止まった、しかしここ
で力尽きるわけには行かない。私は殆ど気力と精神力だけで歩を進
めた。

高台に到着した時、私は直ぐにその場に倒れこんでしまった。

私はこのまま死ぬのだろうか。

人生を振り返ってみた。

ろくな人生ではない。

私の人生の中で、彼だけが唯一の光だった。

薄れ行く意識の中と思う。

今度生まれ変わるなら、普通の人間に生まれたい。

やがて私は、意識を失った。

〔秋人〕 エピローグ

前日から行方をくらましていた飼い猫のすずは、結局朝になっても帰ってこなかった。その代わりに、学校の連絡網である知らせが回ってきた。内容は、『昨夜十時過ぎ、〇〇学校の生徒が、何者かにナイフで切りつけられる事件が発生した。生徒の安全を考慮し、本日は休校とする。生徒は自宅にて待機』というものだった。そういうことなので、僕はその日を家の中で過ごした。

夕方の四時過ぎ、私はスケッチブックを片手に高台へと向った。昨夜約束したので、あの子は来ているだろう思っていたが、高台にあの子の姿はなかった。そして僕はそこで、昨夜亡くなったであろうすずの屍骸を発見した。僕はすずの屍骸を持ち帰ると、家の庭に埋めてやった。

生徒が切りつけられた事件の犯人は、事件当日の夕方、一度学校に現れているということだった。そして、被害者本人や目撃者の証言から、犯人の容貌が浮かび上がった。犯人はなんと僕等と同じ中学生くらいの女の子で、服装は紺色ワンピース、髪型は黒のストレート。

後に、被害者は本校の生徒から度々金銭を脅し取っていたことが分かる。僕もその被害者の一人なのだが、そのほかにも多数被害を受けた生徒がおり、相当な恨みを買っていたと予想される。しかしその中に女性被害者はおらず、犯人は直接強請り被害を受けたわけではないが、強請り被害を受けた生徒と何らかの形で繋がっている可能性があるとのこと。

更に後、当事者の一人が、犯人の背中を自らが持っていたナイフで刺してしまったことを自供した。犯人は重傷を負っている可能性が高く、市内の病院に問い合わせたが、それらしい人物は現れていないということだった。

現場には犯人のものとされる血痕が残されていた。血痕を辿っていくと、例の神社裏の高台まで続いていたらしい。しかし血痕はそこで途切れていたという。周囲を搜索するが、何も発見できず。

僕はこう考えた。犯人は実は、あの高台の女の子だったのではないだろうか。そしてこれはやや現実味を欠いてしまう推測になってしまうが、実はあの女の子は、飼い猫のすずと、同一人物だったのではないか。という結論だった。そうおもう根拠としては、まず、被害者や目撃者が語る犯人の姿が、例の女の子の風貌と一致すること。また、昨夜、彼女が僕の家を訪ねてきた時間帯が、丁度事件の起こった時間帯と一致すること。最後に、当事者が自供した、犯人の背中を切りつけたという供述と、すずの屍骸の背中にのこされた傷痕とが一致するということ。以上を踏まえて考えた結果、僕は先のような結論に至ったのだ。しかし、猫が女の子に化けていたなんて考えるのは、馬鹿げていると言われるに違いない。それに、本校の生徒ではない彼女に、犯行の動機がみあたらない。しかし僕には、そう考えずにはいられないのだ。だって、仮にそれが真相だとして、それに誰かが気づいてあげなければ、あの子が、あるいはすずが、あまりにも救われないではないか。気づいてあげること、救われる何かがあるのではないか。そう思った。なんにせよ僕は、彼女とすずのことは一生忘れないだろう。

後に僕は、すずの墓前に一枚のスケッチと一枚の手紙を捧げた。

拝啓 高台のあなた様

ついに最後まで貴方に名前を聞くことができませんでした。しかし僕は、あなたとは名前などで呼び合わなくても、心の深いところで繋がっていたと勝手ながら思っています。

あなたと高台で一緒に過ごした時間は、僕にとって何にも変え

がたい至福の時間でした。そのときの感覚は、おそらく、普通の人間にはわからない、特殊な感覚なのでしょう。うまくいえませんが、例えるなら、あなたがとなりについて、初めて完成するパズルを眺めるような感覚です。僕は、その完成したパズルを眺めているだけで、幸せだったのです。あなたが訪れてからは、景色がより鮮明になったような気がするほどでした。なので、あなたが突然いなくなってしまったのはとても残念だし、悲しいです。正直に言うと、私は飼い猫であるすずやあなたが、殆ど同時に私の元から消えてしまったとき、僕も後を追って、自らの命を絶とうと考えました。だって、いつだって僕の大事な人は、僕を置いて遠くへ行ってしまうのです。しかし、それでは駄目なのです。いつまでも子供では駄目なのです。僕は、両親の死にだって、どこか受け入れられずにいて、そのせいで、言葉をいまだに話せずにいるのです。しかし、それでは駄目なのです。僕は、前に進まなければいけないのです。どうやら僕には、何事も深く考えすぎてしまいきらいがあるようです。また、問題に直面すると、それを誰にも相談できず、一人で抱え込んでしまうのです。迷惑を掛けまいが為の行為なのに、それがかえって、周りの人を傷つけていたことに、いままできづきませんでした。そういったことも含めて、僕は大きく変わらなくてはいけません。もし、僕が自分の言葉を取り戻したときは、改めてあなたに、自分の口から、ごめんなさい、そしてありがとうを伝えたいと思います。それまでどうかお元気で。さようなら。

敬具

藤沢秋人

墓前には、手紙と共に一枚のスケッチが添えられていた。そのスケ

ツチには、夕日を背景にした一匹の猫が描かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6048q/>

鈴がなる凜となる

2011年2月13日18時12分発行